
青薔薇の加護を君に。

雪白と紅薔薇。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青薔薇の加護を君に。

【Nコード】

N5696T

【作者名】

雪白と紅薔薇。

【あらすじ】

貴族だけれど従者を連れずに入学してきたちよつと変わった少年と、その彼の一途さが眩しく見える年の割に擦れた友人と、勉強だけはやたら出来る不思議ちゃんと、そんな面子を見守りつつ、今日も表面だけはにこやかにお茶を淹れる従者のお兄さんのお話。

各章五話ずつ、短編集？的なsomethingをお届けします。

↓の予定が大分違う方向に突っ走ってしまいました。。。

拙作・「The Mad Hatter in Abstract
World」でローレンシア学院に入学すると同時に遠距離片想
いが決定してしまったやや不器用？なクレセント少年の学生生活を、
主に悪友という名の他人目線でご報告します。

気がつくとだらだら書いてしまう作者が杓を決めてお話を書こうと
いう、習作です。

同じクラスに、ちょっと変わったヤツがいる。

背は高くもなく低くもなく、姿勢はいい。どちらかと言えば痩せ型。教官に呼ばれて返事をする声は、もう声変わりが済んでいるクラスメイトの中でもやや低め。

少し長めに伸ばしたさして珍しくも無い灰色っぽい髪と、お揃いの灰色の瞳。

色彩は至って地味だが、顔立ちはかなり綺麗な部類に入るだろう。視力があまり良くないのか、授業の時だけ銀縁のメガネをかけていた。

入学して一週間ほど経つと、初めての環境に早く馴染もうと他の生徒たちは友人をつくるべく盛んに周りの友人たちと会話をしているのだが、あいつは他のクラスメイトたちと一緒にいることも少なく、無口な性質なのか話しかけても必要最低限の返事しかしないらしいらしいというのも、俺があいつに話しかけたことも無ければ、あいつが俺に話しかけてきたことも無いからだ。特に、話さないといけない用事も無かったし。

休み時間はどこに行っているのか姿が見えないことが多いし、教室にいてもどのグループとつるむこともなく一人でベランダに出てぼんやりと外を眺めているか、机に突っ伏して寝ていることが多い。俗に言ってしまうえば大人数が集まると大抵一人はいる、所謂一匹狼タイプだった。

どうしてクラスの中でも色味通り地味で、周りに打ち解けようとしていない根暗なヤツの動向をこんなに詳しく知っているのかというと。

先日、クラス中の注目を集めるちょっとした出来事があったからだ。ある昼休みのことだ。隣の席のヴィル（男みたいな呼び名だがれっきとした女子だ）と、休み時間になり教室にやってきた俺の従者のヒューと3人で他愛も無い話をしていた時。

いきなり見慣れない色が視界に飛び込んできた。

その明るいローズレッドの髪は同学年の中では見た記憶がないし、制服の胸元のリボンの色が違う。上級生だ。

その女はざっと教室中を見渡すと、スタスタと中に入ってきて自分の席で本を眺めていたあいつの前まで来ると、何やら親しげに話しかけた。

その様子を視界の端に捉えつつ、その前の授業の話をしていたヴィルに適当に相槌を打っていたのだが。

「イリアス、どうしました？」

俺がうわの空なのに気がついて、ヒューが俺の視線の先を追う。

「いや、あれ、知り合いとかじゃないのかと思って」

今度こそ教室の向こうを本格的に見やると、ヒューもヴィルも釣られてそちらに目を向けた。

その上級生は、明るいローズレッドの巻髪に濃い焦げ茶色の瞳をした気の強そうな猫系の、しかしかなり整った顔立ちをしていた。

その雰囲気は猫系というか、ずばり女豹だな。

加えて制服の上からでもわかる大きな胸といい、それに反してすんなりした手足といい、思春期真っ只中の男子としてはかなり魅力的な容姿ではあった。

あつたのだが。

とにかくその女豹はよほど自分に自信があるのかあるいは空気が読めないのか、人気の無いところに呼び出すでもなく他の生徒が大勢いる教室で、堂々としたもんだった。

なぜそんな感想になるのかと言うと。

まあその様子はその上級生が一方的に迫って口説いていると言った感じで、更に言えば席に座ったままのあいつとの温度差が凄まじかったのだ。

端から見ても自信満々にデートに誘ったんだか何なんだか（話の詳細は知らないが大方そんなところだろう）何かを話しかけられたこいつの態度と言ったらそりゃあもう取り付く島もない、という言葉を見事に体现していて。

その女は俺から見ても、見た目だけなら（あくまでも見た目だけ）かなりイイ線いったと思うんだが、話しかけられている当の本人は最初にちらりと視線をやっただけで、後は完全無視で本に視線を戻してしまっていた。

この時点で、教室内の結構な人数がその様子を気にかけていたと思う。

その女豹もしばらくは冷たくあしらわれても笑顔で粘っていたのだが、さすがに相手にされずプライドが傷つけられたのだろう、いきなりあいつの読んでいたバツと本を取り上げると「聞いているの!？」と怒鳴りつけた。

それまで休み時間で騒がしかった教室は、その声で水を打ったように静まり返った。

キレた女豹は綺麗な顔を怒りに歪ませ、そりゃあもう恐ろしい目つきであいつのことを睨みつけていた。

だがその数瞬後、周りが一様に自分に注視しているのに気が付いて、怒りで赤くなっていた顔が羞恥でさらに赤くなっていく。

「…耳元でぎゃんぎゃん騒がないでもらえます？」

俺のいたところからその表情は窺い知れなかったが、漸く顔を上げ、ため息混じりに一言言った、その声の冷たいことといったら。

「返してください」

その手から本を取り返すと、最後に一言。

「喧しい女は嫌いなんだ」

とぱっさり切って捨てた。

決して大きくないのに、その地を這うような低い声はしんとした教室に良く通った。

プライドが高そうな女豹のことだ、軽く声をかければ簡単に引つかると鷹を括っていたのだろう。

ついに涙目になり、「覚えてなさいよっ」と小説の中でしかお目にかかれないような捨て台詞を吐くと、教室の外に控えていた従者と…おそらく取り巻きだろう、数人も置き去りにして走り去っていった。

想像だにしていなかっただろう目の前で起こった展開に呆けていた。それすらも、慌てて後を追っていく。

教室中が啞然と薔薇色の嵐を見送ったのだが、直撃を受けた本人はそれを興味無さそうに見やると何事も無かったように椅子に座り直

して続きを読み始めた。

その椅子を引く音で教室内も凍っていた空気が漸く動き出し、嵐の発生地だった場所にちらちらと視線をやりながらもいつものざわめきが戻ってくる。

肝が据わっているんだが、何なんだか。

「何だったんだろ、あれ」

「さあ…上級生だろうけど」

嵐が去った出入り口から顔をこちらに戻すと、ウイルスがその濃いピンク色の大きな瞳を興味津々といった風に輝かせていた。

「綺麗な人だったけど、なんだか怖い感じだねえ」

入学してきて二週間足らずの新生を品定めて教室に乗り込んでくる時点で、その面の皮の厚さにはさすがに恐れ入る。

「知り合い…というわけでも無さそうですね、あのお二人」

「ないだろ」

「聞いてみようかな」

「後でね、とりあえずもう始まるよ」

教室の壁に掛けられた大きな時計が間もなく次の授業の始業時間だと告げている。

じゃあまた後で、とヒューが教室から出て行き、ほとんど入れ違いに教官が入ってきたので、その話はそこで立ち消えた。

後から聞いた話では、このデジレ・クイルターという三学年上の（くどいようだが見た目だけ）美女はとある都市の領主の娘で、学内外で有名なプレイガールらしい。

曰く、学内で落とせなかった男はいないのだそうだ。

この一件で、早々にその悪名？はオレたち新入生にも知れるところとなった。

まああんな捨て台詞を吐いていくくらいだからその後もういろいろあったんだろうが、そこから先はオレも知らない。

とりあえず、今のところあの一行が再度教室に乗り込んできたことは無い。

怖いもの知らずなヴィルが本人から（！）仕入れてきた情報に寄ると、あいつの実家はレイシーの社交界に出ているなら誰しも一度は名を聞いたことがある伯爵家だった。

オレもあいつの顔こそ知らなかったものの、実家の商売の得意先としてその家の名を聞いたことがあった。

なるほど、その家名を聞けば派手好きそうなデジレが早速寄ってきたのも納得だ。

あいつ本人的にはかなり不本意だろうが、この一件があつてから、あいつは入学早々デジレを振った男第一号としてちょっとした有名な人になってしまった。

ちなみに女子の間ではあいつに対してファンとアンチが両極端に分かれ（面白くないことに八割方がファンらしいが）、男子の間でも面倒ごとに巻き込まれたヤツに対しての同情と、オレには理解できないが学内にたくさんいるらしいデジレファンからの嫉妬で態度が両極端になった。

その女子たちの反応に対してはヴィル曰く、

「うーん、それなりに見た目もよくて、実家も貴族だし、さらにあの目つきで銀縁メガネで、ツンでしよう？モテるのも納得」

ファンかアンチかは、あそこからデレを引き出すところに生きがいを感じるか否かの差だよ、きっと。

とのこと。

女子の思考回路はよくわからない。

まあそれでもオレにしてみれば、あいつはやっぱり変わったヤツだ、という認識を新たにしつつ、入学早々変なのに目をつけられたことに軽く同情したくらいなもので。

「そして、ヴィル様はどちらなんですか？」

笑顔でヒューに聞かれた答えは。

「んー、まあアンチじゃないよ。面白そうだから別の意味では気になるなー」

ヴィルはどうでもよさそうにそう言つと、行儀悪く机の上に座って足をぶらぶらさせた。

1（後書き）

お久しぶりです。もしくは、はじめまして。

雪白と紅薔薇。の、雪白です。

拙作「The Mad Hatter in Abstract World」の登場人物・クレセントの学生生活です。

そっちが思いのほか長くなってしまったので、シリーズもので切り取りました。

帽子屋と同時進行で行きたい…と思っております。
よろしく、お願いします。

さらに数日をなんとなく過ごし、漸くクラス全員の顔がわかるようになってきて、まだ一度も口を利いたことのないあいつも、変わったヤツだ、くらいの認識で特に仲良くなるでもなく、反発するでもなく慣れない日々をそれなりに過ごしていたある日のこと。

午後一番の、剣術の授業。

この時間割は、男子と女子は授業が違う。

男子は剣術、女子は礼儀作法だ。

そして、学年全部の男子が集められてむさ苦しいことこの上ない校庭で、担当教官二人が生徒を二つのグループに分けていく。

経験者とど素人に。

学院に入る前に実家で剣術を習っていた生徒と、全くの未経験の生徒では授業の進め方が違うのだ。ちなみに俺は実家にいた頃に家庭教師に手ほどきを受けていたから経験者側に入るし、自慢じゃないが同学年の前じゃかなり腕が立つと思う。

人数を確認すると最初それぞれのレベルを測るため、教官が適当にペアを組ませでの打ち合いをすと言い出した。

そして運悪く俺の相手になったのが、灰色の同級生、クレセント・ブラックフォードだった。

「お手柔らかに頼むよ」

幼い頃からこれで懐柔出来なかった侍女はいない、取って置きのみを向ける。

……目は笑っていないけど。

「……君、名前、何だっけ」

効くなんて露ほども思っていないが、俺の笑顔をまるつきり無視して、地味な色彩の同級生はけれど鋭い切れ長の目をやや眇めつつ、刃を潰してある模造剣を構えて間合いを取る。

興味の無い同級生の名前など、覚えていないらしい。

まあ俺だって、まだ全員の顔と名前が一致するわけじゃないけどさ。

「イリアス・ノースロップ」

「……ノースロップ商会か」

「そ、一応跡取り」

実家はレイシーで茶葉問屋を営んでいる。姉が一人いるが、長男なので俺が後を継ぐことになるだろう。

「母親が、お前のところの紅茶のファンだよ」

「へえ、ありがたいね」

顔には笑みを貼り付けたまま、じりじりと間合いを詰める。

「さすが、貴族様は親子揃って趣味がいい」
「？」

一歩、踏み込んだ。

俺の言った意味が測りかねたのか、ふと生じた一瞬の隙を突いて一気に切り込んだ。

「っ…」

ギンッ…とガタガタの刃が火花を散らす。

受け止められた刃を押し返されるのも計算のうちで、間髪置かず立て続けに剣を繰り出す。

型通りに打ち込む俺の剣をこれまた器用に受けて流していく。
今のところ流すだけで自分からは踏み込んでくることはない。

模造剣に対する装備は、皮の胸当てと、膝当てと肘当て。

刃を潰してある模造剣とはいえ、当てればそこが気持ち悪い色に変わるの間違いはない。

力加減と場所によっては骨まで逝くことだって十分あり得るのだ。

刃を交えたのは最初の数度で、そこから先は剣の打ち合いだというのに剣を構えもせず、どれだけ切り込んでも太刀筋を読まれているのか全て避けられる。

身長は俺の方が高いから、当然リーチも俺の方が長い。

しかも構えもしていないヤツは隙だらけなのに、どうして当たらない？

「っ…ちょこまか逃げるな…っ」

「君の剣、重いからさ」

横に薙いだ剣をひよいと避けられる。

同時進行で何組も打ち合いをしているのだが、力量に差がある組はあつという間に決着が着く。そうでない何組かも適当に折り合いをつけて次の組と交代していた。

そんな中、周囲もなかなか決着の付かない俺たちに気が付いたらしく、いつの間にかギャラリーが増えていた。

それもそうだろう、避けられてばかりじゃ決着の着けようもない。

「いちいち受けてると疲れちゃうよ」

「…ふざけんな…っ」

一見クレセントの防戦一方に見えるが、その実、疲労困憊なのは俺の方だ。

息一つ乱れていない飄々としたその様子が、バカにされているようにイライラする。

「やたら滅多らに振り回しても、疲れるだけだって」

そう言った次の瞬間。

本当に一瞬で、懷に飛び込んできたと思ったら、

「がっ…」

避ける間なんてあるわけない。

気付いたら腹に剣の柄をもろに食らって吹っ飛んでいた。
ガラン…と手放した剣が転がる音がする。

口々に「すげー」とか「逃げてんじゃねー」とか好き勝手なことを
言っていたギャラリーが啞然と静まり返ってた。

「……そこまで！」

教官の声を切っ掛けに、我に返ったように周囲がわっと沸く。

俺をぶっ飛ばした張本人はしまった、という顔でこちらに駆け寄っ
てきて、まだ地面に這い蹲ってた俺の手を取って引っ張り上げた。

「ごめん、勢いつけ過ぎた」

「おい、お前、今のどうやって…」

打たれた腹を押さえて咳き込みながら最後の瞬間移動？について問
い質す。

「君の剣、すごいな。重たくて途中から受ける気無くした」

俺の質問には答えず、片眉と薄い唇の端を上げてニツと笑った。

「なら大人しく受けてさっさとやられろ」

「ハッ、冗談」

苦いものを噛み締めながら俺が吐き捨てた言葉に、クスクス笑いながら剣を鞘に戻す。

なんだかこいつに対して持っていたイメージがぶれてくる。

もつとぶつきらばうで愛想の無い、スカしたヤツだと思ってたんだけど。

「ブラックフォード、これは剣術の授業だぞ」

近寄ってきた教官が渋い顔をする。

確かにこいつは多少俺の剣を避けたくらいで後は避けてばかりだったから、今の一戦はあいつの剣術の腕を知るには不足だっただろう。

「だって教官、こいつの剣マジで重いですよ」

オレなんかじゃ太刀打ち出来ません。

その軽い口調とひょいと肩を竦める様は、それまでの無口で大人しい印象を完全に覆すもので。

「長剣は苦手なんです。一通り型は習いましたけど、初心者レベルですよ」

「初心者はノースロップの剣をあれだけ避けたりは出来んだろう」

「体術は相当扱われましたから。でも剣を振り回すのは下手です」

「…ノースロップ、腹は大丈夫か」

教官はそれ以上はあいつを責めることも無く、あいつの突きが入った腹を見て今度は俺に声をかけてくる。

皮の胸当てには突かれた後がくつきりと凹んで見えた。

「大丈夫です。痣にはなるでしょうけど」

「救急箱に軟膏が入ってるから、塗っておけ。…次っ」

俺たちの次の組に支持を出しながら、教官は他の生徒のところに行ってしまった。

「悪かったね、大丈夫そう？」

肘当てをはずしながら申し訳無さそうに話しかけてくる。

「ああ、どうって事ないよ」

まだじくじくと痛む腹に顔を顰めて、結構強がって言った。
胸当ての下の肌は有り得ない色に変色しているだろう。

「おい、イリアス、大丈夫だったか？」

「ブラックフォード、お前すごいんだな」

「なあ、あれ何なんだよ？」

「何が？」

「あの最後突っ込んでったスピード。おかしいだろ」

あの瞬間を見ていた数人がこちらに寄ってきて話しかけてくる。

教官も見えていただろうに何も言わなかったけれど、皆あの速さが尋常でないと思ってるんだ。

皆に一斉に話かけられて、面食らったように灰色の目が少し大きくなった。

「…別に、何をしたわけでもないよ？」

「嘘付けー」

「何やったんだよ」

「別に…でも、小さい頃から足は速かったし、実家の家庭教師がスパルタだったから体術なら結構自信あるよ？剣は重たいから苦手だけど」

それだけじゃない？

そう言って小さく笑うと、一人でスタスタと水場に向かって行った。

「…あいつ、思ってたのと大分感じが違うんだな」

その背中を見送りながら、誰かがポツリとそんなことを言った。

2 (後書き)

本筋では出していなかった、クレスの苗字が判明…

同じクラスに、ちょっと変わったヤツがいる。

それも一人じゃない。

さらにそれぞれがとある出来事により、どちらかと言えば有名人の部類に入る。

そして9割方、本人たちはそのことをどうでもいい、もしくは鬱陶しいと思っている。激しく同意だ。

まず一人目は、クレセント・ブラックフォード。

王都レイシーでも有数のブラックフォード伯爵家の三男。

少し長めに伸ばした髪は灰色にどうやら茶色が少し混じっているらしい。

お世辞にも綺麗な色合わせとは言えないが、反比例するように顔立ちはかなり整っている。

授業の時だけ銀縁のメガネをかけていて裸眼のときは濃い灰色の涼しげな目は気難しそうに細められていることが多く（当然のように眉間にも皺が寄る）、やや近寄りがたい雰囲気を出している。

近視は目を細めると少しだけ遠くが見えるようになるらしいから、無意識にやっているのだろうが、とある女子があいつの藪睨みが怖くて近寄れないと言っていた。

かつこいいけどちょっと怖い、と女子が敬遠する理由の一つだ。

あの剣術の授業以降、徐々に入学当初の頃の見えない壁のようなものは無くなったものの、2ヶ月が経った今でも特に親しい友達を作っていない。放課後も誰かと過ごしていると言っ話は聞か

ない。

と言うよりも、最近は休み時間はほとんど教室にいない。
放課後もベルが鳴るのとほぼ同時に教室を出て行く。逃げるように
いや、実際逃げている。

薔薇色の嵐の一件後、噂が噂を呼んだのか一時期は休み時間毎に他の
クラスの生徒がひっきりなしに教室を覗いてくるようになった。
男女問わず、学年問わず。それこそ入れ替わり立ち代りで。
そして、どこかしらに呼び出されているようだ。

その内訳は、5割がわかりやすく敵意を剥き出しにしたデジレ親衛
隊で（その大半が男子だが中には女子もちらほらいたりする）、他
3割がそれなりに整ったヤツの容姿に釣られてきた軽めの（あくま
でも俺の主観）ミーハー且つ、あいつの目つきの悪さをものともし
ないガッツのある女子で、残り2割があいつの運動神経を聞きつけ
たサークルの勧誘と思しき連中といったところ。

それぞれ話の内容は推して知るべし、だろう。
まあ推さなくてもあちこちから噂は流れてくるのだが。

ただ律儀にそれらの呼び出しに付き合っていたのは最初の1週間程
度で、その後はまさに「逃げるが勝ち」を見事に体現して授業中以
外はどこかに姿を消すようになった。

ここ数日は気がつく授業にもいないことがままある。

クラスの中の連中はその様子を9割の同情と1割の嫉妬を込めた視
線で生温かく見守っている。

俺個人の感想としては、10割気の毒、と思うだけだ。
羨ましいなんて、これっぽっちも思えない。

そしてそんな外野からの猛者たちに抜け駆けるように、授業が終わった瞬間さつさと教科書を鞆に詰め込むあいつにここ数日張り切ってアプローチ(?)をかけている小柄な少女。

類は友を呼ぶのだろう。おそらく。

「ねえねえ、今日の放課後って、何してるの？」

「別に」

「じゃあさっ、イリアスの部屋でお茶しない？実家から新茶が届いたんだって」

授業が終わった瞬間にそいつの席に駆けていき、嬉々としてそいつをお茶の時間に誘っている。

拳をぶんぶん振りながら力説する必要があるのかどうかは不明だ。ちなみにオレは、一度も自分の部屋にそいつを呼ぶことを承諾していないんだが。

「…宿題しないといけないから、て言うかそれどころじゃないからまた今度ね」

「えーっ、いいじゃん、お茶くらい。皆で優雅にティータイムしようよぉ！」

「…悪い、他のヤツ誘ってよ」

そう言うって取り付く島もなくお茶の誘いを断ると、鞆を持つとスタスタと教室を出て行ってしまった。

少女はそれを唇を尖らせて見送って、トボトボとこちらに戻ってくる。

「また振られてしまいましたか」

「ヒューの入れてくれるお茶、超美味しいのになあ」

横でまだむくれている銀灰色の頭を、今しがた教室にやってきたヒューは苦笑しながらよしよし、と撫でた。

…飼い主と子犬の図だな。

「気長に誘えばそのうち来てくれますよ。今日は厨房からチェリータルトをいただいて来ました。お好きだと仰ってましたよね？」

「ほんと！？やったーっ」

そうしてそれまでの仏頂面から一転、現金に万歳をしてヒューに抱きつかんばかりに喜んでいるのが、もう一人の変人。

オレの隣の席の、通称ヴィル。

正しくはヴィルヘルミーナという名前だが、いいのっ長いから以下省略！とは本人の弁だ。

変人、というのは少々言葉が違うのかも知れないが。

「凡人」の枠に嵌まらない、という意味で、変人。

いや、奇人か？

…どっちでもいいか。

砂漠に囲まれた町の出身で、褐色の肌に肩に届く真っ直ぐな灰銀色の髪と、くるくる動く大きな濃いピンク色の瞳。

ストロベリーピンクの双眸は、彼女の心の内を鮮やかに映し出す。

たかだか二月やそこの付き合いだが、わかりやすいことこの上ない。

その結果なのか、さっき的一幕を見てもわかるように言動がやや子供っぽい。

13歳とは思えない小柄で華奢な体型も手伝って、入学当初隣の席

に座った彼女に自己紹介をされるまでガキが間違っ
て紛れ込んできたのかと思ったほどだ。

だが、その見た目と言動に惑わされてはいけ
ない。彼女がその名を知られている理由。

今年の入学試験で学院創設以来の最高得点をたたき出したのは、
他でもないこの褐色の妖精なのだ。

「あの子もくればよかったのにねえ？絶対人生損してるよ」

イリアスの自室にて、好物のチェリータルトを頬張っているヴィル
は悔しそうに話を蒸し返した。

「ヴィルはああいう男が好きなのか？」

ここ最近の執着振りを見るにクレセントに惚れたのかと思っ
ていたが、きょとんとして首を傾げたその反応を見るとそうではないらしい。

まあ、例えそうだとしてもアプローチの仕方はかなり偏っているが。一拍置いてオレの言った意味を飲み込んだのか、笑いながら否定した。

「違うよお。そんなんじゃないってば。けどさ、あの子本当はあんな大人しい子じゃないよ、絶対。本性隠してる」

至極楽しそうににまにまと口元を緩ませて紅茶に口をつけた。

「それにうちのクラスで従者がいないのって、私とあの子だけじゃない？」

「そう言われてみれば…そうですね。見かけたことはありません」

ヒューもクレセントの従者らしき人間を見たことは無いらしい。

オレは言わずもがな。

オレの従者であるヒューも、入学してから一度もそいつが従者らしき生徒と一緒にいたところは見たことが無いと言う。

どうやらヴィルは従者がいない者同士、あいつに対して勝手に仲間意識を持っているらしい。

このローレンシア学院は、将来学者や医者といった専門職を志す子供が学ぶ高等教育機関。

もちろん誰しもが入れるところではなく、生徒の多くが近隣諸国の貴族の子息、令嬢、それに連なる財力を持つ大きな商家の子供たちで入学試験に合格した者、さらには市井の学校で極めて優秀な成績

を残している者も毎年何人かが奨学金を受けて入学してくる。
いくら財力があっても、ある程度の頭がないとこの学院の門はくぐれないのだ。

そしてこの学院のおそらく最大の特徴だろう、ほとんどの生徒は寮生活を共にする従者を一人連れてくる。

何しろ、お嬢様、お坊ちゃまとして他人に身の回りの世話をまかせつきりにして生きてきた連中である。自分の着替えがどこに仕舞つてあるのかもわからないような奴らだ。

実際は部屋の掃除や洗濯は寮のスタッフがやってくれるし、食事は食堂で食べるので専属の身の回りの世話係なんていなくても十分生活していける。

だがそれ以上の細々としたことまで他人に任せて生活していた者たちがいきなりこの寮に一人で放り込まれようものなら、最初のうちは相当難儀するだろう。

そうは言ってもこの学院は、学問を修め将来人を使う立場に就くことになる生徒を支えるパートナーをも一緒に教育する場でもあった。純粹に主の従者（所謂身の回りの世話係）として学院に来た者も、将来はその右腕となるべく付いてきた者も、それぞれが将来を見据えた教育を受けることが出来る。

イリアスもヒューを連れてきたが、それはノースロップ家のメイド頭の息子でありイリアスの兄的存在だったヒューを将来イリアスの右腕に、と考えたイリアスの父の意思によるもので、イリアスの身の回りの世話係として付いてきたわけではない。

実際は面倒見の良い兄のようにあれこれと手を焼いてくれるのだが。いくら必要ないと言っても聞きやしない。

最近は何かにつけて一緒にいるヴィルの面倒まで見ているので、こいつは単純にただの世話好きなのだ。

ヴィルのような平民出身の奨学生ならいざ知らず、傳かれることに慣れた貴族のボンボンが従者を連れず一人で学院に来るなんて、一体どこの貧乏貴族なんだか。

だが、あのブラックフォード家が貧乏ということとは有り得ないから、従者がいないのも何か事情があるのか、はたまたあいつ本人が変わり者ということだ。

「私だって、イリアスとヒューと仲良くならなかったら、まだ一人ぼっちだよ、きっと」

「そんなことはありませんよ。ヴィル様は私たち以外にもたくさんお友達がいらつしやるのでは？」

「…あの子達は私じゃなくて、私のノートと仲良くしたいんだよ」

ヒューの慰めを一蹴して、ヴィルはタルトを口に放り込んだ。不機嫌を装っているが、その端々に若干の寂しさが滲む。

言動や見かけが子供のようだからと言って、この学年一の秀才は決して鈍くも疎くもない。

「でも私全然ノート書かないから、一度貸した子はわかんなかったって言って、もう次は貸してって言ってこないけど」

「ヴィル様のノートは凡人では理解出来ないのでしょうかね」

「字が汚すぎるんだろ」

「違うもんっ」

頬を膨らませてそう言う手と手に握り締めていたフォークを置き、ティーカップを両手で包んで口をつけた。

「…こうして一緒にお茶したり、遊んだりなんてしないもん」

だから、あの子も一人ぼっちみたいだし、仲間に入りたいなと思っ
て。

「ダメ？」

そう言って上目遣いでオレたちを見上げてくる。

あいつの場合、友達が出来ないんじゃないかと、作ろうとしていない
ようにも見える。

確かに前の剣術の授業以降、ヤツに話かける連中も増えていたが、
そのどれとも一定の距離をとっているようだった。

「まあ本人が望んで…と言うよりは仕方なく一人でいるんだろうけ
ど、もし来るって言うならいいんじゃないか」

「おや、この間のことはいいんですか」

反対しなかった俺に、ヒューがおどけたように片眉を上げる。

授業で打ち合いをして負けたことを言っているのだ。

悔しかったことは確かだが、後日耳にした噂が本当なら腹を立てる
のもバカバカしい。

「まあヴィルの言う通り面白そうなヤツではあるからな」

「私も淹れるお茶が一杯増えるくらい、なんてことありませんよ」

仲間二人の同意を得られて、やたつとガッツポーズを作る。

「ですが、あまり執拗にすると嫌われるかもしれませんよ？確か彼、
喧しい女性は嫌いだと言っていましたから」

「……………そうなんだよねえ…なんかいい案ない？」

「学年主席の頭で何とか考えろって」

むー、と腕組みをして考え込むヴィルの横でオレはいつものように今日の復習を始め、ヒューも自分の課題を広げ始めた。

漸く、夜も寒くなくなったある日の晩。

いよつと。

小さく掛け声を出して、俺はここ何週間で勝手に馴染みの場所に認定した寮の屋上の、更に屋根の上上がり、隠してあったシートを取り出して敷くとその上で行儀悪く胡坐をかいた。

しばらくじつと、夜空を見上げる。

今日は下弦の半月。

ポケットに突っ込んであった小箱から中に整列している細長い筒を一本取り出し、片端を口に咥えて同じように取り出したマツチで口から遠い端に火を点ける。

一つ、吸い込んで吐き出した煙は雲ひとつ無い夜空に滲んで溶けていった。

従者のヒューにすら教えていない、秘密の場所と時間。

未だに抜けていない悪習慣は、ヒューにバレたら何と言われるか。依存症とまではいかないだろうが、気を抜きたい時には無性に欲しくなる。

もう一度盛大に口から煙を吐き出すと、人差し指と中指の間に挟んだ地上の星を天にかざす。

目の前で夜空に光る数多の星の中に一つ、紅い光が追加された。満点の星空からは、地上の暗闇の中で小さく、けれどはっきりと光るそれを見つけられるのだろうか。

詮無いことをぼんやり考えつつ、しばらくそうして夜空を独り占めする贅沢を堪能していると。

下の方で、ギイツと扉の開く音がした。

誰か屋上に来たらしい。

月見をするには絶好の夜だが、もう消灯時間はとっくに過ぎている。

今いる場所は下からは死角に入るので、このまま音を立てなければ今来たヤツも自分に気付くことは無いだろう。

静かな空間を邪魔されるのは癪だが、逆に降りていくわけにもいかない。

さっさと戻ってくれないかな。

イリアスは一つ息を吐くと意識を屋上から天上へと戻した。

その直後。

タンツと屋根の向こうで音がした。

何かが着地したような音。

反射的にそちらを振り返る。

距離にして大股で十歩強。

半月の光はその先を照らすには物足りない。
だが闇に慣れた目は、音の主が人間の、おそらく男であろうと思われるシルエットを捕らえている。

あちらも先客がいるとは思わなかったんだろっ。

そこから動かずじつとこちらを伺っているようだった。

お互いに、おそらくは驚きと猜疑に、息を詰める。

時間にすれば、十秒もないくらいなんだろうが、その時の俺にはひどく長く感じた。

「こんばんは」

ああ、と内心納得して口から煙を吐き出す。

そいつのいる方とは逆方向に流れていく紫煙。

未だ顔は見えないけれど、多分に警戒を含んだその声は、今日の昼間にも教室で聞いた声だった。

「…ほんとだったんだな」

「…何が？」

「噂」

常人ならあんな梯子も何も無いところからこの屋根の上に上がるなんて芸当、出来るわけがない。

相手もこっちが誰だか大体は察しがついたんだろっ。

斜めになった足場ものともせず、スタスタとこちらに近づいてくる。

「『三月ウサギ』」

「…………別に、隠してるわけじゃないんだけどさあ」

音は低いけれど本人のイメージよりも大分軽い調子の声が、あつさりと認めた。

柔い月明かりに照らされて見下ろしてきたのは、世界に数人しかいないという『役者』らしい、とまことしやかに囁かれていたクラスメイト、クレセント・ブラックフォードだった。

「そこ、座っていい？」

断りを入れると、返事をする前に俺の横にぺたりと座った。

しばし、二人で満天の夜空を眺める。

「…君の連れさ、」

沈黙を先に破ったのは、三月ウサギだった。

「連れ？」

「銀髪の」

「ああ、ヴィルか」

あいつは俺の連れでも何でもないんだが。

「オレをお茶に呼んで、どうしたいんだろ」

「さあ？…友達になりたいんじゃないかねえの？知らねえけど」

方法がややおかしいのはご愛嬌だ。

ふうん、と納得しきらない返事が返ってくる。

そんなことを思いながら新しい煙草に火を点けた。

すうつと吸い込んで、盛大に吐き出す。

「美味しい？それ」

自分でヴィルの話を振っておきながら、全然違う方向に話が飛ぶ。暗くてはつきりとは見えないが、こちらを向いた顔がしかめ面をしているのは間違いなかった。

「嫌いか？悪いな」

「風上にいるから平気だけど」

—だから気付かなかったんだ。

そう一人ごちて顔を戻したクラスメイトに、わざと勧めてみる。

「お前も吸ってみる？」

こんな時、きつと悪い顔をしてるんだろうな、という自覚はあるんだ。

「いい、ウサギは過敏だから」

予想通り断られたが、理由は意味不明だった。

「ウサギだから？」

「『三月ウサギ』だから。……人より足が速いしジャンプもできるけど、耳も鼻も、多分人より敏感」

「多分てなんだよ」

「…ガキの頃からコレだから、人間の普通がどんなだかわかんないんだよね」

「へえ」

「それで、目が悪い」

銀縁のメガネをはずすと、着ていたシャツの胸元に引っ掛けた。

「それも、タトゥーのせいなのか？」

「多分ね。…まあ木の上で本読んでたからっていう有力説もある」

クスクス笑いながらそんなことを言う。

さつきから視線はずっと天上を仰いだままだ。

「教官たちは知ってるんだろ？」

「ああ」

「だからか」

「何が」

「ほら、俺がお前に吹っ飛ばされた時さ、教官何にも言わなかっただろ」

「ああ、そうだね」

あれ、大丈夫だった？

今更だけど、と軽く聞いてきやがった。

「青くなっただくらいで、どうってことない」

本当は向こう一週間は寝返りを打つたびに目が覚めるくらいの重傷打ち身だったけれど、意味も無く強がり口をつけて出た。いくら相手が規格外だからって、負けたのは面白くない。しょうがないと頭ではわかっていても、だ。

「そう、ならよかった」

その強がりを見透かしたかのように唇の端を吊り上げて笑った……気がした。

なんだか、その口調が。

「よく来るの?ここ」

「うん、たまに」

逆方向を向いて、ふと生じた苛立ちの芽を煙と一緒に吐き出す。

「煙草吸いにな」

「会ったことなかったよね。オレ結構よく来るけど」

ここにすれば、見つからないからさ。

そうやってげんなりしたようにため息を吐いた。

ああも毎日追い回されてちゃ、そりゃ疲れるだろうよ。

「大変だな、お前も」

「いい迷惑だよ、ホント」

「ほとぼり冷めるまでの辛抱だろ」

「いつだよ、それ」

「粗方伸したんだろ?親衛隊の方は」

毎日毎日校舎裏に呼び出されておきながら、負けたことがない。やられて帰ってきたという話は聞いたことが無いし、改めて思い返せば傷一つ作つてるところを見たことがない。

目の当たりにしたことは無いが、強いのだ。おそらく桁違いで。ここに来るまでは勝手な想像で、貴族お坊ちゃんってのはなよなよ

したヘタレなヤツばかりなんだろうと思っていたが、案外拳で語る派も多いらしく派手なケンカもしばしば耳に入ってきた。

「一回本気でシメてやったら大人しくなるかと思ったんだけど、逆効果だったみたいで」

一度に相手にする人数が増えたり、得物が物騒になったり、さ。

：気位が高いだけ、性質が悪いのかも知れない。

苦労性の三月ウサギは、はあ、と大きく息をすると、ついに仰向けにバタンと倒れこんだ。

「女子の方は？デジレは結局どうなったんだよ？」

男子にやつかまれている原因は主にこっちだ。

俺だって見ていて面白くない部分は……ある。多少は。

ギリギリまで減っていた煙草を吸殻入れにしている缶に落として、新しい煙草を啜える。

闇夜に慣れた目には、マツチを擦って点けた火がひときわ明るく見えた。

「あー、あれもいろいろ無理。超面倒くさい」

うあー、と心底面倒臭そうな口調で世の男どもをあつさりと敵に回した。

「羨ましいこと言ってるじゃねえよ」

こいつの置かれている状況を羨ましいとはこれっぽっちも思わないが、さすがに今の発言はいただけない。

とりあえず、学院の全男子学生を代表して目の前の色男を晴れて「男の敵」と認定しよう。
だが認定したその矢先。

「興味無いもん」

「……」

…今なんか、聞いちゃいけなかったことを聞いた気がするぞ。

もしか今俺が置かれているこの状況は危険なのか？

身の危険を感じるべきなのか？

別の意味で男の敵認定か？

「……あ、お前今なんか勘違いしただろ」

暗い月明かりの下でも、ある種の恐怖に満ちた俺の視線を感じ取ったのか、こちらもまた怪訝そうな視線を投げてよこした。

「ソツチの趣味じゃないよ、オレ」

「そう聞こえたけど？」

「いや、超健全だから。女の子好きだから」

「じゃあ興味ないってなんだよ」

「……」

言ってることがめちゃくちゃじゃないか。

だが視線を天上に戻した容疑者からは反論が返ってこない。

どうやらなんと言ったらしいのか、考えあぐねているらしい。

「……今ここでは恋愛とかする気ないんだ」

しばらくしてから出た言葉は、急にトーンが落ちた。
色が落ちたといった方がいいか。

…いわゆる、心ここに在らず、ってやつだ。

「ここでは？お前、地元に彼女とかいるの？」

「…まあ、そんなところ」

「ふうん、…それぞれのまんまあいつらに言っただけじゃねえの？」

「…」

「ま、賢明だな」

こんな入学早々好きな子がいるなんて言ったら、学外と見るのが妥当だろう。

さらに相手は世間知らずの貴族のお嬢様だ。

万が一性質が悪いのに素性を着きとめられたりしたら、何をされてさるるか。

特に、あの嵐は。

「で、デジレは？あれっきりなのか？」

缶に灰を落としながら、気になった女の話振る。

あれにこそ、その彼女の存在を知られたらまずいだろう。

「…お前、もしかしくなくても結構ミィハーなのな」

「まああれだけ目立っておけばミィハーでなくても気にはなるだろう」
「余計なお世話だって」

せつかく心配してやってるのに。

「……とりあえず、残念ながら全くもって好みじゃないから」

「同感だ」

「何度来られても、優しくしてやる理由が無い」

「鬼だな」

急速冷却された声が、ひたすら冷たく追い返している、と白状した。心底嫌がっているその様子にくつくつと笑いがこぼれる。

郷里に女が居るとはいえ、学院の中でなら多少の火遊びくらいどうと言うことないだろうに。

三月ウサギ殿は結構堅いらしい。

「男の敵」の称号は挽回してやってもいいかもしれない。

「ご愁傷様」

「…性格悪いぞ」

「お前の彼女のことを吹いて回るほどは悪くねえよ」

暗がりから驚いたような眼差しを感じて、わざと明るい声で確約した。

「お前さ、今度何かまずいことになったら俺たちのところに来いよ、匿ってやる」

借りとか思うなよ、ヴィルもちったあ静かになるだろうし。こっちとしてもあれいい加減煩いしさ。

俺の冗談半分な勧誘にふふつと笑いながら、そのうちね、と今まで聞いた中では一番前向きな返事を返してきた。

「秘密はお互い様だし。むしろ今までの期間を考えたら、貸しにな

ってると思うけど?。」

もう話は終わったとばかりに立ち上がった背が言ってる意味がわからず、眉を顰めると楽しそうな声が降ってくる。

「今までだって、黙っててやってたじゃん」
「は?。」

何のことだ。

「『ウサギ』は鼻が利くんだよ?。」

――制服着たままで煙草吸うのはやめときな。

目を見開いた俺を見て闇夜でもわかるくらいニッと笑うと、来た時と同じように梯子も何も無いところからひょい、と姿を消した。

4（後書き）

煙草は20歳になってから。

同じクラスに、変わったヤツがいる。

一人は今日も今日とて目の前で幸せそうにシュークリームを頬張っている、他称・褐色の妖精。

砂漠の民に多く見られる褐色の肌に重力に忠実な真っ直ぐの銀灰色の髪と、面白いことを見つけるとキラキラと輝き出すストロベリーピンクの大きな瞳。

いつだかクラスメイトがこいつの瞳をして、ロードクロサイトのようだと称したことがあった。

「^{ロード}薔薇色の（クロ）^{サイト}石」という名の、透明度の低い、底の見えない石。

前期試験まであと二週間と迫ったある日の放課後。

俄かに焦りと、早くも諦めが漂い出した学院内の空気に当てられて、俺とヒューもお茶の席に教科書を持ち込んでいた。

しかしこの目の前の同級生は教科書の一つも広げるでもなく、一人だけいつもと全く変わらない様子で今日も俺の従者であるヒューが

お茶の席に用意したシュークリームをもぐもぐと頬張っている。

始めは授業後に教室で俺としゃべっていたヴィルをヒューがお茶に誘ったことだ。

そのときにこいつはヒューの淹れるお茶にいたく感動し、こんなに美味しいお茶は初めてだと手放しで褒めた。

それもそのはず、ヒューの給仕は全て実家でメイド頭をしている彼の母親直伝のもので、それこそ王宮で出しても遜色無いと紅茶問屋を営む俺の両親も絶賛するレベルだから。

いつでもいらつしゃい、と言うヒューの言葉を額面通りに受け取って、それ以来放課後は毎日俺の部屋に入り浸るようになった。

その都度ヒューは笑顔で、最近は当然のように毎日三人分のお茶とお菓子を用意するし、主である俺も別に咎めることも無ければ何をするでもないの、今ではちゃっかりソファの一角を定位置に定め、午後のお茶を堪能し、夕食の時間までまったり過ごしていく。

今では、お茶の後にはヒューは器用にも宿題であろうノートにペンを走らせながらヴィルの話相手になり、俺は聞こえてくるそれに時々突っ込みを入れながら教官が鬼のように出してくる宿題と格闘しているのが放課後の当たり前の光景だ。

その傍らでヴィルも宿題はするが、それ以外に勉強らしいことをしてるところを見たことが無い。

その宿題でさえ、俺の三倍、いや、五倍速で終わらせてしまう。

授業中の小テストでだって有り得ないくらいのスピードを発揮する。問題を読むのと同時に答えを書き込んでいくから基本的に、ペンは止まることはない。

そして試験開始五分もすれば、さっさと答案用紙を提出して教室を出て行ってしまうのだ。

おそらくこいつはこのまま本番の前期試験といえども前日でもテスト勉強と名の付くものを一つもしないだろう。

賭けてもいいが、ヒュー相手じゃ勝負にはならなそうだ。

そうして今日も、余った時間は俺たちの話に笑いながらもとんでもなく分厚い何かの専門書のページをサクサクと捲っていた。

「…納得いかねー」

「ふぁいは？」

「ヴィル様、ちゃんと飲み込んでからしゃべりましょうね」

「……………っ、なにが？」

口の中いっぱいのカスタードクリームをなんとか飲み込むと、ヴィルは意味不明だった先の台詞の正体を明らかにした。

「なんでコレが学年一位なんだ？」

俺は広げた教科書から顔を上げ、目の前できょとんと目を瞬かせているクラスメイトの顔を見て、

「…クリーム付いてる」

盛大なため息を零した。

脱力してテーブルに突っ伏した俺に非難の声が振ってくる。

「レディに対してコレとはなんですか。まったく紳士の風上にも置けませんね」

聞き咎めたヒューの視線が切っ先鋭く俺を突き刺す。

何でも一部では薄青の髪と切れ長の紺藍の瞳も相まって、「氷の帝王」などと渾名されているらしいこのブリザードも、物心付いた時

から横で見ている俺としてはこの程度じゃ痛くも痒くもない。
慣れというものは恐ろしい。

「口の周りクリームだらけにしてるヤツがレディだって？」

それこそ本物のレディに失礼だが。

再び教本に目を落とす気力もなくなった俺は、頬杖をついて頭をそ
ちらへ向けて呆れたような声を出す。

「ヴィル様も。シュークリーム手掴みはいけませんと、何度言っ
たら」

俺に対してとは打って変わって子供に言い含める物言いでヴィルを
やんわり注意するヒューの豹変ぶりに、ほんの少しだけイラッとし
た俺は衝動的に、それこそ言っではいけないであろう一言を口にし
た。

「それにこのつるぺたのどこをどうすればレディになるんだよ」

「イリアス」

「ひいどあいゝ！つるぺたって何ゝ？」

猛然と抗議が始まるが、指に付いたクリームを嘗めながらだと全然
迫力が無い。

「胸はこれからおつきくなるのゝ！」

だからどこのレディが床に着いていない足をバタバタさせて口を尖
らせたりするんだつつうの。

「わが主ながら今日という今日は」

ブリザードが主人の暴言により鋭さを増す。

「イリアスの地質学が赤点を脱出するよりもあたしの胸がおつきくなる方が先だもん！」

それから後悔したって遅いんだからね！？

ブリブリと怒りながら出てくる負け惜しみなんだが強がりなんだかよくわからない台詞に、自分でも止められない笑いと共に「賭けるか？」と振った言葉は、蹴破らんばかりに勢い良く開かれた扉の蝶番の悲鳴にかき消された。

「クレセント・ブラックフォードを出しなさい」

薔薇色の嵐の再来だった。

俺はため息と共に視線をやり、ヒューはブリザードの矛先をそちらに向け、ヴィルは大きな目を更に丸くして突然襲来した薔薇色の美女を穴が開くほど凝視した。ついでに言うとも口も開いている。今ので埃が舞ってるだろうから、口は閉じた方がいいぞ。

「ここには来てねえよ」

「ああ、何かと思ったら男漁りしか能の無いメス猫でしたか」

ついに来やがった、そんなげっそり感を隠そうともせずに二人して言い投げた。

そして先の台詞で氷の帝王のギアが変わったことに気がついて、今乱入してきた連中に手を合わせる。

ヤバイスイッチを入れたのは、お前たちだぞ。

ここにはヴィルも居るし、手は出さないだろうと思うけれど。口の方は知らねえからな。

「この辺りで姿が見えなくなったのはわかってるのよ」

先の俺たちの台詞をものの見事に流して、自分の言いたいことだけを繰り返した。

「耳も悪いのか。残念な女」

三月ウサギのヤツ、毎日毎日こんなのを相手にしてんのか。ご苦労なこった。

別の意味であいつにも心の中で合掌。

「ずいぶんと賤のなっていない従者を連れていること、レイシーの紅茶問屋も高が知れようものね」

悪い耳でも自分に対する悪口は聞こえるらしい、口元をひくつかせてあからさまに侮蔑の目を向けてくる女に氷の帝王は入学以降最低温度を記録したであろう視線を返し、ハッと嘲った笑いを返す。

ちなみに、こいつの口の悪さは辺りの気温が下がるのに比例する。そろそろヴィルの耳を塞いでやったほうがいいかな。

……あ、聞いちゃいないみたいだからいいか。

「扉を開ける時にノックもせず、招待されてもいないお茶会に土足で乗り込んでくるような人に礼儀に関してとやかく言われる筋合いはありませんね。学院一の尻軽女の品性なんて、所詮そんなものなんでしょうが」

「違うない」

笑いながら今や部屋の冷房と化している相方に同調し、わざとバカにするようにそう言ってやった。

なっ…と俺たちの言い草に真っ赤になって言葉を無くしているデジレの、本人以上に後ろの取り巻きたちに目をやる。

今扉の外でデジレの後ろを固めているのは…五人か。内三人は教室の外でも見たことのある顔だ。

「お前らさ、こんな女のどこがイイの？」

これはマジで冗談抜きに教えて欲しい。

俺の問いかけにデジレの背後の空気が更に悪化する。

それでもご主人様を前に吠え立ててこないところは、さすがと言うか、何と言うか。

三月ウサギ同様、これからは俺たちも放課後いろいろと気をつけないといけなくなりそうだ。

「早く彼を出しなさいよ！！出さないなら探させてもらっけれど」

部屋の中は誰かさんのおかげでこんなに涼しいというのに、目の前の‘こんな女’は顔を真っ赤にして金切り声を上げる。

「はあ？ふざけんな。居ないって言ってんだろ」

「他を探しに行けばいいのに、耳も悪ければ要領も悪いんですね。いくら顔の造作が良くても中身がこれでは、彼に相手にされないのも道理でしょう」

まあそれがわからない頭だからこうして追いかけてるんでしょうが。

鬼の形相で喚くデジレとその取り巻き、冷気を更に大量発生させた

「氷の帝王」と俺。

一触即発の、睨み合いの、そんな最中。

「いいなあ、おっぱい大きくて」

充満する張り詰めた空気をぶち壊すように、それまでぼかんとデジレを見つめていたヴィルの口から緊張感の欠片もない呟きが零れ、テーブルに頬杖をついていた俺の腕がカクン、と外れた。

それまで眼中になかったであろうヴィルの乱入に、他の連中も毒気を抜かれた顔をしている。

周囲同様呆気にとられた後、一人堪えきれず笑い出したヒューはヴイルの頭を優しく撫でて、もう少しだけ大人しくしていてくださいね、と今までの絶対零度の眼差しはどこへやら、子供をあやすような口調で囁いる。

相方の二重人格っぷりを生温かく横目で見ながら、不意に頭の中でカチリと音がした。それまでずっと探っていたナンバーキーの最後の一つが当たったような。

ああ、そうだ。

この女。

女豹っていうよりかさ。

食虫植物っぽい。

綺麗な薔薇には棘があるとはよく言うが、こいつの場合は毒の方がいい。合ってる。

触るまで痛くない棘じゃなく、もう、うっかり近寄った時点でもう瘴気にやられそう。

その外見で獲物を引き寄せておいて、逃げられないところまでふらふら寄ってきたら、隠していた毒であいつらみたいに骨抜きにするんだろう。

見た目だけは、やたら綺麗なくせに。

遠巻きに、あくまでも遠巻きに眺めるだけで十分だ。

今日初めてこの女を間近で見てからなんとなく胸の中でモヤモヤと

形にならないでいた嫌な感じの形容詞が漸く浮かんできて、心の内がすつきりした。

とりあえず、横のブリザードは止みそうにないし、ヴィルまで標的にされたら更に面倒くさい。

考えたくないくらいに。

誰がって。そりゃあもう。

もうここに居る時点でカウントはされているだろうが、芽は小さいうちに摘んでおくべきだ。

この辺でお引取りいただかないとな。

モヤモヤが解消された爽快感と目の前の有害物質に対する苛立ちを合わせれば、常々人の悪いと称される微笑みにも磨きがかかろうつてもんだろ。

「なあ、」

まあこれで、毒を食らわば皿まで、だ。

「聞いたぜ？あいつその頭が気に入らないんだって？」

「あいつって？」

「クレセントですよ」

「そうなの？そんなこと言ってたの？あの子」

「相手にして欲しければ銀色に染めて来いというようなことを言っただけですよ」

綺麗な赤なのにね、ヒューと俺の方を交互に振り返ったヴィルの肩先で、銀灰色の直毛が流れる。

「ヴィル様の髪も日が当たると銀ですね」

「うーん、銀って言うより鉄色じゃない？」

「そんなことありません。綺麗な銀ですよ」

「じゃああたしもあの子の好みのタイプってことかな」

「さあ、彼が好みのタイプそのままを言ったのかは定かではありませんが」

ヴィルを黙らせることを諦めたのか、さりげなく小柄な体を自分の後ろに隠しながら小声で話しかけ、ヴィルの注意を逸らす。

任された俺はその隙にあちらさんの注意を引きつけ引導を渡そうと口を開く。

「いいじゃねえかよ、そんなに追っかけるんだったらあいつのお望み通りその赤毛の色抜いて、一発ヤツてもらえばいいじゃねえか」

愛しい愛しい三月ウサギが手に入るんだぜ？簡単だろ？

冷気に当てられたかのようにわざと棘を増やした台詞と共に、にやりと意地悪く笑ってやればその麗しい顔が更に歪む。

「まあそんな今のその顔で銀髪になんぞしたら正真正銘の鬼婆だけだな。鏡、持って来てやろうか？」

ご自慢であろう薔薇色の髪を全否定されたとなれば、もうあいつを追いかける理由はいっつの気を引きたいなんて可愛らしいものではなくなっているんだ。

取り巻きのコレクションに加えたいが為ですらない。

単なる執着だ。

本人は気付いているんだろうか。

端から見たらなんて醜い。

食虫植物よろしく、罨にかかる獲物だけで満足していればよいものを。

本性を晒すからこんなことになるんだぜ？

たぶん、三月ウサギを手に入れてからのことなんて（あり得ないけど）考えてはいないだろうな。

「今のままでも十分赤鬼で通用するけどね」

扉の向こう、取り巻きたちの更に後ろから声がした。

あの夜、屋上で聞いたのよりもやや低い音が、今の不機嫌さを如実に表してはいるけれども。

「わお、漸く真打登場だね？」

みんな揃ったじゃーん！

ヒューの肩越しに、ヴィルがロードクロサイトを煌かせた。

5（後書き）

あゝ、こんなに遅くなるつもりなんてなかったのにーorz
日本のどこかの読んでくださっている皆様、いつもいつもお待ち
してほんとにすみません。。。。

そしてイリアス視点・三月ウサギの友人曰く、はひとまず終了です。

短編集にしたかったのに、どうにも作者の悪い癖でだらだら書いて
いつてしまいます。。。。

ならばせめて視点を変えようと。

五話で切るっていうのはきっちり守ろうと。

…ぐだぐだな習作ですが、これからよろしくお願いいたします。

そんなこんなで次は誰にしようかしら。

別の人視点になってお話は続きます。

帽子屋のほうも書かないとだし、しばらくまた間が空くかも知れま
せん。。。。 気長に待ってくださいまし。 m（―――）m

雪白でした。

6（前書き）

後期の始まりです。

なんかもつ、最後までイリアス視点で行くことにしました。

新学期。

未だ衰えを知らない太陽がじりじりと皮膚を侵食しようとする躍起になっている中庭で、俺はいつもの面子といくつかある大木の下でテーブルを一つ占領して昼食をとっていた。

直射日光の下は暑くとも、日陰に入っしまえば乾いた風が心地いい。

俺の目の前ではもう良くも悪くもお馴染みとなつてしまつた光景が繰り返されている。

辛めの味付けの焼き麺を啜りながら、もはや日常と化した食事風景を眺めた。

休暇前のお茶会乱入事件以降、この面子で行動することが増え、毎日の放課後のお茶はもちろん、こうして昼休みも気がつくと四人でのんびりと時間を潰していた。

まずは正面で大きな口を開けてサンドイッチを頬張っている、他称・褐色の妖精、ヴィルヘルミーナ・レインウォーター。

実はこれは本来の彼女の名前を日常用はかなり省略したもので、本名は一度聞いたくらいでは到底覚えられないほど長い。

先日、何かの折にこいつが自分のフルネームを暗唱（もはやあれは呪文の域だと思う）した時には、その場に居た男三人揃って珍妙な顔をしたものだ。

だがこいつ曰く、地元では誰も彼もがこんな風に長つたらしい名前らしい。

横に居たクレセントに聞かれて内訳も説明していたが、何やら歴代の先祖の名前を羅列しているんだとか。
らしいとかばかりだが俺的にはこいつの名前にそこまで興味が無いし、らしい止まりで十分だった。

おそらく特注サイズだろう小さな制服に身を包み、濃いピンク色の大きな瞳をキラキラさせてもぐもぐと口いっぱいパンを頬張る姿は、高等学院の学生と言うよりか学校に上がりたての児童にしか見えないが、こう見えて休暇前の前期試験もテスト勉強の一つもなしに軽々と学年一位の座を防衛した天才なのだ。

―人は見かけによらない。その一。

そして今もそのパンの間から具がこぼれそうになるのを右隣から口と手を出して甲斐甲斐しく世話を焼いているのが、氷の帝王の異名を持つ俺の従者の、ヒュー・ドルジア。

妹と兄の様な、お嬢様と従者の様なその光景に、この場だけ見るとこいつが一体誰の従者だかなんてわかりやしない。
それこそヴィルとつるみ始めた当初は、まるで妹のように世話を焼いているのと変わらない様子に、世話好きなヒューが小動物の面倒を見ているようなもんだと何と無しに眺めていたのだが。

どうやら俺としたことが、読みは事実と大きく違っていたらしい。

先の彼女が呪文…もとい、呪文のような名前を明かした時も、横でその実かなり真剣に聞いていたこの二つ年上の従者は、たった一度聞いた呪文を俺からすればスラスラと暗誦してみせた。

「惜しいっ、ちょっと違う」

俺にはどこが違ったのかなんてわからなかったが、ヴィルはそれに驚いたような目を向けて、しかし嬉しそうに声を立てて笑った。

「どこが違いました？」

笑顔の中にちらとだけ悔しそうな色を浮かべ、正解を請うその眼差しからは「氷の帝王」の片鱗も窺えない。

名前の主は一文字抜けていたらしいおそらくは家名の部分を訂正し、でも、と言葉を続けて、無邪気に彼の努力を粉碎した。

「全部覚える必要は全然無いよ。あたしたちだって、友達の名前全部なんてちつとも覚えてないし」

普段は全く使わないしき、とカップに口をつけてどうでも良いことのように肩を竦める。

「そんなことより八十八星座覚えるくらいしたほうがいいよ」

「そんなことだなんて。名前は大切なものですよ？」

「呼んでそれがその人だってわかればいいんじゃない？」

だからヴィルで十分、そう言って専門書から目を上げて自分の方に向けられた大きな瞳を見返したこいつの、その時の紺青の濃さときたら。

今も今とて傍らの少女を見やる眼差しの藍さと、それを全く理解せず無邪気に受け流してまた一口サンドイッチを齧った天才の笑顔に、これからのヒューの苦勞が透けて見えた。

…頭の回転はすこぶる良いんだろうが、どうしてこうも鈍いんだか。

小さくため息を吐いて左隣に目をやると定食のトレイやお茶のグラスを差し置いて嫌でも目に付くのが、特大ボールに山盛りの…キャベツの千切り。

傍を通りかかる学生たちが何だこれ、と視線をやってくるのもお構いなしにマイペースにとんでもない量の千切りキャベツを口に運んでいるのが、地味な色をした一番の新顔。
クレセント・ブラックフォード。

…どうしてこうも俺の周りには良くも悪くも若干様子がおかしい連中しかいないんだろうか。

「それって、キャベツ何個分？」

「さあ…わかんないけど」

そう答えながらもフォークは止まらず、特大ボールに山盛りの野菜は着実に俺よりも少し背が高いだけのひよろつとした体に収められていく。

世間はいいつのことをどう評価するんだろうか。

表向きは王都レイシーの有力貴族、ブラックフォード伯爵家の…確か三男坊。

そしてその実、世界に数人しかいないと言われ、希少価値は高いにしろ活用方法が全く持って不明、という摩訶不思議な刺青を持つ『役者』。

過去には稀に現れる特殊能力から権力に利用された者も居たらしい

が、今のところこいつにそんな最悪な自体は訪れていないらしい。
本人曰く、今現在『役者』たちは当代の王家によってその手の危険からは保護されているらしい。

どういった経緯でそうなっているのかは知らないが。

そんなそれがどうした的な付加価値を外してみれば、銀縁のメガネをかけた顔はかなり整っていて、うっかり気を惹かれる女子も少ない。

ただし、その彼女たちが周囲から変わった趣味だと囁かれていることも事実で。

なぜなら人間の大方の外見的評価なんて自身の持つ色の美しさで決まるもので、パーツの美しさは二の次というのに、こいつときたらお世辞にも綺麗とは言いがたい灰色に茶の混じった髪に、炭のような濃い灰色の瞳。

まあこればかりは親からもらったものなので本人を責めるわけにもいかないが、政略結婚の際には相手の色味も重視される貴族社会において、彼の色は「はずれ」だと言わざるを得ないだろう。

両親は何色なんだろうか。

まあ、友達やるのには色味とかどうでもいいし。

「毎日毎日、良く飽きないで食べるよねー。胃袋半端なくおっきいよね」

あらかたサンドイッチを食べ終わったヴィルがお茶を飲みながら感心したような、呆れたような声を出す。

「…別腹」

「ええっ？三月ウサギって胃袋二つなの！？」

「そんなわけないだろ」

「解剖してみましようか」

「ヴィルの頭をか？」

「ヴィル様の天才的頭脳は解剖しても理解不能でしょうが、この方の胃袋がいくつあるかは開いてみれば一目瞭然だと思えますよ」

「お前、何気に失礼だろ」

「開く的前提で話を進めないでくれるかな」

呆れた俺の声と冷ややかなヒューの声が容赦なくヴィルに突っ込みを入れた。

ただ真実、本当に胃袋が二つあるのではと勘繰りたくなるほど、毎日目目の前のクラスメイトは良く食べた。

ちなみに前出の山盛りキャベツも、日替わり定食をきっちり平らげた上でのことだ。

―人は見かけによらない。その二。

俺たち三人に自分の胃袋がネタにされているこの状況を呆れたような目で見つつ、それでも『三月ウサギ』の手と口はキャベツを順調に減らしていた。

薔薇色の嵐が襲来した日。

いろいろな意味で絶妙だったタイミングで登場したあの騒動の元凶は、

「本当にいい加減諦めてくれないと、オレだって黙ってないよ?」

と言つて、あるうことか廊下で俺の部屋の前で大立ち回りを始めやがった。

だがそこは、そうは言つても三月ウサギのすばやさだ。

一人目がうめき声を上げて崩れたと思つたら、連鎖反応のようにバタバタと五人全員がカーペット敷きの廊下に沈んだ。

二分後、俺はテーブルに頬杖をついたまま部屋の内外の有様を半眼で眺めてため息を吐いた。

ため息も出ようつてもんだ。

教官には当事者同士で説明してくれよ。

「あれ? 終わつちやつた?」

「ヴイル様、危ないです。避難しましょうね」

「もう終わつてゐるって」

妖精は腰に回されたヒューの腕から身を乗り出して、廊下に伸びている取り巻きたちとこの状況を拵えた張本人を交互に見やり至極楽しそうな声を上げた。

と言つか、おい、涼しい顔しやがってドサクサに紛れて何やってんだ。

俺に言わせりゃこいつの手の早さも相当だと思ふ。

ガキの頃から知ってるが、こんなヤツだとは知らなかったぞ。

―人は見かけによらない。その三。

「すっごいねー! はやーい!」

そしてお前もちょっとは気にしろよ。
一応女だろ。

「ねっ？面白いつて言ったでしょ？」

身を擦つてこちらを振り向き、妖精の渾名にふさわしくぴよんぴよん飛び跳ね…ようとしてヒューの腕が邪魔で失敗した。

「お前いつまで抱きついてるんだよ」

「安全が確認出来るまでです」

思わず呆れ声になった突っ込みに、ヴィルを腕に抱きこんだまま平然とした返事が返ってきたので、声をかける相手を変える。

「おい、ヴィル、いい加減脱出しろ」

「うん」

何気にお前、貞操の危機だぞ。

恥らうでもなく、かと言って嫌がるでもなく、うんしょ、と色気も何もあったもんじゃない掛け声をかけながらヴィルは腰に巻きついていて自分よりも大分長い腕をなんとか引き剥がそうとする。

もう大丈夫だと判断したのか、あんまり度が過ぎて嫌われることを警戒したのか、氷の帝王はあっさりと妖精を解放した。

アホらしくなって入り口付近を見やると、死屍累々の取り巻きを背景に氷の帝王とはまた違うブリザードが吹き荒れていた。

「オレにちよっかい出すだけならまだしも、クラスメイトの勉強の邪魔までするって、本当にどこまで人に迷惑をかければ気が済むんですか？」

「…っ私はっ…」

「あなたのその傲慢で自己中心的なところ、いくら綺麗な容姿でもいただけないですよ。その自信どこから出てくるんですか？何をやっても許されるとでも？」

ウチの氷の帝王も目じゃないくらいの吹雪を背負った背中からぞつとするほど冷たい声がして、頭半分ほどヤツより背の低いデジレの形のいい顎を掴み上を向かせる。

彼女の屈辱に歪んだ顔が、集まってきた野次馬たちにわざと良く見えるように。

ここからは髪に隠れて見えないけど、絶対目は笑ってないぞ、あれ。その向こうの野次馬たちの引き攣った顔から断言出来る。

あの女王様然としたデジレが取り巻きを伸され、下級生、しかも噂の『三月ウサギ』に言いようにあしらわれている様は間違いなく学内の明日のトップニュースだろう。

その舞台がオレの部屋の入り口だというのが、とてつもなく迷惑だが。

「でもクレセント、早く食べないと次の授業外でしょ？」

まだ半分以上残っている野菜を見てヴィルが急かした。

「いや、ホールだろ」

「え？」

「今日から男女一緒にダンスの練習ですよ」

「うそ、今日からだっけ？」

「まあ急い方がいいのには変わりませんが」

「皆は踊れるの？」

ヴィルが三人に聞いてきた。

「イリアスと私は基本の動きは一通り出来ますよ。クレセント様も出来ますよね？」

「ああ、だからサボる」

「ええっ」

「合同だろ？あんな大人数、バレやしないって」

「男女の人数の調整をしているでしょうから、出ないとバレますよ」

心底かつたるそうに、でも少しスピードを上げてキャベツを口に運ぶ。

本人曰くこれもタワーの影響で、野菜が体に合うんだそうだ。食べないと調子が悪くなるんだと、初めて俺たちと昼休みを一緒に過ごした時に言っていた。

そりゃあもう目の前の大盛り野菜にヴィルが目をキラキラさせて食

いついて、氷の帝王の背後にブリザードを発生させた。
ちなみに朝は朝でこれまた飽きずに必ずバナナを三本も四本も食べている。

…バナナって、ウサギの好物だったか？

「あたしもサボろうかなあ」

本読みかけだし、とヴィルが唇を尖らせて呟く。

「ヴィルはちゃんと練習した方がいいよ。出来て損はないから」

たった今サボる宣言をした張本人が何言ってるんだ。

「そうだよ、やったこと無いんだろ？基本覚えて、放課後ヒューにでも相手してもらえばいいんじゃないか？」

優しい主人だなあ、俺。

「じゃあヒューが一から教えてよ」

「お教えしたいのは山々なんですけど私も生憎女性パートはほとんどわかりませんし、今日の授業は出て頂いた方がいいですね。私も女性パートの動きを見ておきますのでヴィル様もきちんと習ってきてください。飲み込みはいいんですから、毎日練習すればすぐ出来るようになりますよ」

ヒューは甘く笑って銀灰色の髪を撫でた。

放課後の個別レッスンは確定らしい。

しかも毎日。

「クレセントもちゃんと出ようよ」

「オレはもう出来るからいいの」

「でもお前、前期あんなにサボってたんだからちゃんと出とかないと単位やバイんじゃないの？」

「…人がたくさん居るところって、嫌いなんだよね。騒がし過ぎて頭痛くなる」

眉根を寄せて心底嫌そうな顔をした。

じゃあね、とトレイと見事に空になった特大ボールを手にスタスタと席を立って行った。

結局この日、三月ウサギはダンスの全体授業を自主休業し、俺の予想だと屋上の屋根の上で午後が一番いい時間を昼寝に捧げたものと思われる。

その読みが一部正しく、しかし肝心なところが違っていたと判明するのはそれからそう遠くない日のことだ。

6（後書き）

色云々に関しては、この世界の「美の基準」のようなものだと思う
てくださいまし。

顔の造作やスタイルがいいことはもちろんよいことですが、それ
以上に髪や瞳、更には肌の色など、個人の「色味」に重きを置かれる
傾向があります。

例えば、多少のブサ子ちゃんでもさらさらの金髪に紺碧の瞳の持ち
主であれば周りから「美少女」認定してもらえる、みたいな。

三月ウサギのグレーも悪くはないんですが、イリアスが言うように
「地味」なんでしょうねえ。お貴族様にはやっぱり明るくて綺麗な
色味の方が多いらしいです。

7 (前書き)

えーと、ついにみんなにバレました。

その大量の郵便物たちは各地から毎週樹木の日定期馬車に載せられて学院に届く。

定期馬車が毎週毎週片道一週間から十日かけて霧の海を渡り、学生たちの実家のある各地から集めてきた手紙やら仕送りやらを、放課後に各学生に配達する。

そのときどこで何をしていようと必ず配達人が宛先本人を見つけ出し、確実に手渡される。

学院七不思議の一つである。

とは言え、周囲数十キロを霧に囲まれた文字通り陸の孤島であるローレンシア学院において、学生たちが日常的に持ちうるほぼ唯一の外界との連絡手段であるそれは、当然、学院生活の中で大きな楽しみの一つだ。

……特に、故郷に大切な人を残してきている学生にとっては。

「ねえ、クレセントってさ、」

いつものように放課後俺の部屋に集合してお茶を飲んでいた時、ヴィルがいきなり身を乗り出してクレセントに詰め寄った。

そのきらきら輝くロードクロサイトに、ちらりと視線を交わす俺と

ヒュー。

今度は何を言い出すんだ。

「レイシーに彼女いるの？」

爆撃をもろに受けた瞬間口に入っていたチーズケーキに盛大にむせて、横に居た俺に背中を叩かれヒューには水を差し出される。

水を飲み込んで漸く落ち着くと、三月ウサギは俺にギロツと批難の視線を寄越す。

―お前、しゃべっただろ？

―いいや、何も？

―じゃあなんでこいつがこんなこと言い出すんだよ！？

―俺だって知るかつつの。

そんな俺たちの無言の会話には全然頓着せず、引き金を引いたヴィルは腹を抱えて笑い、ほらね？と俺たちに得意気な顔をして見せた。

何がほらね？だ。こんな爆弾落としというて。

「絶対そうだと思ったんだ！昨日受け取ったあの薄紫色の封筒、その前もその前も届いてたでしょ？絶対女の子だって！差出人だあれ？彼女？」

なんで教えてくれないのー！？と三月ウサギに向かつて手足をバタバタさせて、しかしものすごく楽しそうに批難轟々だ。

…その鋭さと洞察力を欠片でも自分に向けられる目に割けないものか。

「何でそんなこと覚えてるんだよ!？」

どうでもいいだろう!？」

そう言つて三月ウサギはその整つた顔を顰める。

バレバレだつて。顔赤いぞ。

「気付いてないの? 毎回毎回、他の郵便に紛れて何気に超目立つてたから!」

ねえ?

同意を求められ、まあ確かに、とヒューが相槌を打つ。

「クレセント様はそもそも郵便の量が人より少ないですからね」

「その割に毎回何かしら来てるよな」

「あんな可愛い女の子仕様な封筒を男子が受け取っていると、本人が思う以上に目立っているものですよ? 特に昨日はその一通だけでしたし、さすがに私もおや、と思いました」

ヒューもここぞとばかりに追い風を吹かせた。

そんなことしなくてもこの様子じゃ大丈夫だと思うんだけど。

こいつの心配性はいつものことだから、しょうがないか。

そうでなくても惚れた女が他の男に興味津々(例えそれが恋愛対象でなくとも)だなんて、面白く無いことこの上ないだろうがさ。

俺なんかはまだ名前も知らないその彼女の、存在だけは知っていたから、封筒を見てもああ例の、と思うのと同時に、あれじゃそのうちバレるな、と思つてはいた。

それも、誰にも何も言わなかったけれど。

彼女に関しては誰にも何も言わないって、約束だったしな。

「なんで彼女だって決め付けるんだよ」

「えー、じゃあ何？定期的にあんな可愛らしい封筒でお手紙をくれる男友達が居るの？確かクレセントって兄弟はお兄ちゃんしかいなかったよね？」

「まああれは女からでしかないよな」

「だからなんで決め付けて」

「毎回受け取る度にあんなに目えキラキラさせちゃって、バレバレ」
「お前の性格だったら嫌な相手からなら受け取っても即ゴミ箱行きだろ」

「もしやのお母様という可能性もありますよ」

「ほーう、こんな近くにマザコンがいたとはな」

「違ーう！」

普段はどちらかというとクールで大げさに取り乱したりしないこいつが赤面して焦っている様がだんだん面白くなってきて、俺もヴィル側に回ることにした。

どっちみち、もうこの面子には吐くしかないだろ。

「手紙を寄越すってことは別に学院には居ない子なんだし、いいじゃないねえ？」

「そうだよ、俺たちに知られたところで何が変わるわけでもねえし」
「誰に言いふらすこともありませんよ。他にも地元の恋人や許婚と文通している学生も大勢いますし」

「そうだよ、別に珍しくもないんだから教えてよー」

「さっき超目立ってたって言ってたじゃないか」

「それはあたしたちがいつも隣で受け取るの見てたからだよー」

ぶんむくれた顔でそっぽを向く三月ウサギ。

反則的にウサギを袋小路に追い詰めた天才はふふー、としてやったりの顔で笑う。

「たぶん嬉しそうにしてるのも、他の人はそこまで気付いてないと思うけどね」

「…どうしてヴィルは他人のことになるとそう鋭いんだろうな」

「クレセント様、相対的にお互い様だと思いますので、その眼差しはやめて下さい」

「何が？」

「何でもありませんよ」

「俺の周りにはいろんな意味で残念なヤツばっかだな」

「お前何か引き寄せてないか？」

「俺のせいだよ」

男三人で当事者を前にして、残念ながら本人にはわからないであろう会話を繰り広げていると、いきなりのけ者にされた本人がリスの様に頬を膨らましてまた暴れ出した。

「もう、いいからクレセントの彼女の話！どんな子なの？やっぱり貴族のお嬢様？」

「……絶対、他の連中には言わないでよ？」

あの件以降大人しくなったとは言え、デジレのこともある。たとえ離れていても彼女に害が及ばないとは言いい切れない。この学院にもレイシー出身の学生は数多くいる。

大げさだと言われても、彼女を守ってやれない今の状況で彼女の存

在が自分をよく思わない連中に知られるのは極力避けたい、と真剣な顔で訴えた。

俺たち三人が神妙に、けれど好奇心いっぱい顔で頷くを見ると三月ウサギは観念したようにため息を吐いて、妖精の取調べに応じる姿勢を見せたのだった。

大騒ぎしている間にすっかり冷めてしまったお茶をヒューが淹れ直してから、薄紫の封筒の送り主についてヴィル捜査官の取り調べが始まった。

追求を受ける容疑者？は質問の多くを「秘密」とお茶を濁しながらも、ぼつぼつと言葉少なに答えていく。

手紙の差出人は貴族のお嬢様などではなく、伯爵家に出入りしている商家の使用人であること。

とても物静かで、読書が好きで、働き者だということ。

引き出した情報に興奮して、わーとか、キヤーとか言いながらヴィルはソファの上にあったクッションをぎゅうぎゅうに抱きしめた。かつて実家で姉やその友人たちが、人の恋愛話で同じように騒いでいたのを思い出してちよつとげんなりする。

「ヴィル、お前いい加減うつせえぞ」

「いいじゃん、楽しいんだから！ねえ、その人名前なんていうの？」

「何度聞いても秘密」

「えー、なんで？そんな珍しい名前？名前で特定されちゃうような？」

「珍しくはないけど、念のため」

「商家って、どこのお店に居るの？年は？もう働いてるんだから、年上！？」

「ゴ想像二才任せシマス」

「なんでカタカナなの？」

「クレセント様は熟女好みなんですねぇ」

「…幼女趣味に言われたくないね」

「おや、私にはそんな趣味欠片もありませんが」

「よく言っぜ」

「イリアスまでなんです」

「ヒューってそんな趣味あつたの？」

「ヴィル様、私はこの方のように人様に顔向け出来ないような趣味は一つも持ちあわせておりませんよ」

面白そうに瞳を瞬かすヴィルに向かっていつもの笑顔を浮かべるが…
…やや口元が引き攣ってるぞ。

「どの面下げて抜かしやがる」

先程の意趣返しだろうか、やや立ち直った三月ウサギは頬杖を付いたままにやと笑った。

あーあ、八つ当たりしちゃって。

それを氷の帝王は口元は笑顔のまま視線だけ氷点下の色でじろりと見返す。

まあ、事実でなくても焦るわな。

「ふーん。で？なんて名前なの？」

「…三回聞いてもダメなもんはだめ」

ヴィルはそんな二人を交互に見やり、興味があるんだか無いんだか、最終的にはどうでもよさ気に力技で話題を元に戻した。

途中から話が変わる方向に行ったが、やはり警戒してかその後もいくらヴィルが問い詰めても彼女の働いている店も、彼女の名前、年齢すら、頑なに教えてくれなかった。

まあ、俺でも言いたくないな。

惚れてる女のことなんて、あまり人には話したくない。

…恥ずかしすぎるだろが。

けれど好奇心旺盛な妖精は猶も食い下がった。

「えー、全然収穫がないよお！せめて目の色くらい教えてくれないじゃない！珍しい色なの？」

「髪は銀ですよ」

「だからどうして決め付けるんだよ」

「あの女に、銀髪に染めて来いと仰ったんですよ？」

ヒューは誰に対しても基本敬語だが、クレセントに向かうと慇懃無礼な感が否めない。

だからお互いに八つ当たりはやめろって。

言っている本人たちは無意識なのかも知れないが。

「本当に銀髪なの？あたしと同じ色？」

嬉しそうに身を乗り出すヴィル。
なぜそこで喜ぶ。

周囲の気温が下がるからやめてくれ。

「…いや、ヴィルのより大分白っぽいな」

「へー、綺麗だねえ」

「見たことないだろ」

見ても居ない彼女の髪を褒めてクッションを抱きしめる。

…中の綿を替えないといけないな。

「じゃあ銀髪に目の色は？緑？赤？琥珀も素敵だよなー…あ、ヒューみたいな青？」

何でも合いそうだねえ。

そう言つてニコニコしながら隣のヒューを振り仰ぐ。

こいつらの身長差は座つていてもそう縮まるものではない。

「はずれ」

「えー、じゃあ何？」

「オレンジ、紫、茶色、ピンク、黄緑、水色、黒、グレー、白…」

「イリアス、数打ちや当たる作戦は無能過ぎるのでどうかと思ひます」

知っている奴の瞳の色を手当たり次第に挙げていった俺に、ヒューはバカですかとでも言いたげな視線を寄越す。

主人に向かってその目はなんだ。

「人海戦術は基本だろ」

「しかも白つて何ですか」

「おい、当たりはあつたか？」

口の悪い従者は放っておいて、俺たちのやり取りを途中から笑って見ていた秘密主義者に正解を仰ぐ。

押し当てていた拳を下ろして、くつくつと漏れる笑いをどうにか引っ込めた口から出てきた答えは。

「すごい、全部はずれ」

「えーっ！もう、クレセント、本当にいい加減教えてよおっ」

「…どうして、そんなに知りたいの？」

真っ直ぐ、ロードクロサイトを覗き込んで、訊いた。

「当たり前じゃん！」

一瞬きよんとした妖精は次の瞬間、イタズラが成功した時の悪ガキの笑顔でこう言い放った。

「あの手紙を受け取った時に、クレセントが二週間の内で一番幸せそうな顔するから！」

友達の幸せの素、超気になる！！

びしっとクレセントに向かって人差し指を向けたまま、ねっ！？と首だけはこちらに振り返る。

俺はそうか？、と流したが、一緒に同意を求められたヒューは最悪に複雑な顔になった。

「幸せって、伝染するんだよ？」

振っておきながら俺たち二人の返事など必要としないヴィルは満面の笑顔で宣言した。

「幸せの素、か」

ヴィルの勢いに面食らった顔をしていた三月ウサギは、一瞬苦しうに目を伏せて、ははっと小さく笑った。
そして、その笑顔のまま、漸く、正解を口にした。

「青紫」

「紫ってさっき言った!!」

「違う、青紫」

猛然と抗議を始めた妖精に、きっぱりと言い張った。

「青でもないし、紫でもないよ」

少し考えて、口で説明するの難しいな、と呟いた。

「あとは直接、本人の口からいろいろ聞いてよ」

「？」

「会わせてくれるの？」

色めきたつヴィルにそっぽを向き、更に残っていたチーズケーキの欠片を口に放り込み、やや乱暴に紅茶で流し込んで言葉を継ぐ。

「再来年には、彼女もこの学院に来るから」

「ええっ!?!」「は?」「!?!」

「それまでは秘密。ただし」

今みたいな話は彼女に向かっては絶対しないで欲しいんだ、と更に
テンションの上がったヴィルの追求を遮り、赤くなった顔で俺たち

の誰しもが予想だにしていなかった言葉を口にした。

こんな風に頻繁に手紙をやり取りする彼と彼女の関係が、未だ彼の側の一方的な片想いだと。

「彼女だなんて、一言も言っていないよ？」

にや、と人の悪い笑みを浮かべて、容疑者はその供述を最小限にまんと逃げ遂せた。

「ヴィル様の、幸せの素は――」

帰り際、戸口でヴィルを送り出すヒューの声が聞こえたが、眠かったのでさっさと部屋に引っ込んだ。

7（後書き）

なんだかイリアス、ひたすら突っ込み役だな…

8（前書き）

遅くなりました。

ダンスパーティを三日後に控えた、放課後。

俺の私室ではお茶の後にテーブルが端に寄せられ、ヴィルがダンス特訓の追い込みをしていた。

始まってから判明したことだが、ヴィルは極端にダンスが苦手だった。

意外と言うか、何と言うか。

天才にも苦手なものがあつたんだ。

まあそりゃあ、人間なんだから苦手の一つや二つや三つや四つ。

「…あつ」

「ホラ、止まらない！」

懲りもせず、今日もまた怖いもの知らずな妖精は氷の帝王の足の上にステップを踏んだらしい。

それでブリザードが発生することは有り得ないのだが。

もしそうならこの部屋はとうの昔に永久凍土と化しているだろう。

正直、自分の従者ながらその辛抱強さには脱帽だ。

しばらく経った頃、ヴィルが自分の部屋に戻ってから後片付けをしているヒューに聞いたことがある。

「足、大丈夫なのか？」

「ええ、ヴィル様軽いですし」

「軽いつたってあんだけ踏まれりゃ」

「役得だと思えば安いものですよ」

「…お前、ホントにアレのどこがいいんだ？」

「アレとはどれのことでしょう？」

「……やっぱ幼児体型がツボか」

はぐらかそうとするヒューを茶化すと先日クレセントとのやり取りを思い出したのか、一瞬真冬の視線で睨まれた。

「まだ十三歳ですよ？これから背だつて伸びます。私にとっては好都合ですよ、余計な虫が寄ってきませんから」

自覚してくれるまでは、当分あのままで。

「『優しいお兄ちゃん』から昇格するのは結構大変だと思うぞ？」

「今のところなかなか便利ですよ。警戒心も持たれませんし」

当面の目標は、あの方の生活の一部になることですね。

「どんだけ長期計画なんだよ」

「そう長くは無いですよ。卒業までには何とかします」

「…十分長えよ」

「イリアスも人のこと言えませんよ」

薄く、けれど幸せそうに笑む相棒を見て、なんだか今度は逆にヴィルに同情したくなった。

立て続けに三度もステップのタイミングを間違えた妖精は、その後なんとか持ち直したようだが、個人レッスンを始めて一月以上経った今でも、未だに一曲の間に少なくとも五回は踏んでいる。

本人曰く、頭ではちゃんと動きの流れを把握し体もその通りの順番で動かしているつもりなのだが、リズムに乗ってその通りに動かす、というのがどうしても…わからない、と。

特訓を始めた当初、もしやと思ったヒューがダンスを一旦止め、ヴィルに曲に合わせて手拍子だけをさせてみたら、案の定。

……褐色の妖精は、極度のリズム音痴だった。

それでも最初に比べれば見違えるほどよくなった。

始めの頃は、本当にワンフレーズすら続かなかったから。

だがここまでくれば踏まれる方も慣れたもの。

その長身を生かして条件反射的に止まりかけた小さな体をさりげなく、その実強引に次のステップに持っていく術を会得していた。

そのヒューの如才ないリードと、曲中ずっと口をへの字に曲げた本人の必死の努力でどうにか一曲踊りきることが出来たのはつい二、三日前のことだ。

授業では散々相手役の男子学生の足を踏み、ヴィルがダンス下手なことは周知の事実となっていた。

中にはヴィルとの順番が回ってくるとあからさまに嫌な顔をする奴もいたし、まともに相手をしようとしないう奴も居た。

教官に目をつけられて減点されてたけどな。

この時ばかりはさすがの能天気ヴィルも落ち込んで、パーティに出席するのを止めようかと弱音を吐いていたが、どうにかヒューが立

ち直らせたらしい。

腹の底では本人も悔しかったのだろう、その後も地道に練習を重ねて現在に至る。

今日は三月ウサギはここには来ていない。

大方屋上の上で先週届いたスマレ姫からの手紙でも眺めているんだろう。

先日の取調べにも折れず、俺たちには名前すら明かされなかった彼の想い人をして、ヴィルはその瞳の色にちなんで「スマレ姫」と呼んだ。

どんな顔なのか、姫と呼ぶにふさわしい年齢なのかどうかも知らないが、その日のうちに仲間内ではその呼び名が定着した。

部屋の中央でくるくるよたよた回る二人から目を離し、読んでもいない本に目を戻す。

俺も屋上の上に一服しに行きたいところだが、いかんせん、涼しい顔して何気に手が早いことが発覚したヒューと、これっぽっちも警戒心を持っていないヴィルを二人きりにするのはヤバイと思うのは…心配のし過ぎだろうか。

ただでさえあおして必要以上に…いや、ダンスの練習なんだから必要か…引っ付いてるんだし。

本当なら気を利かせて外に出て行けばいいんだろうが、まあ何も用事が無い時の俺が自分の部屋に居て何が悪い。

九割がヒューに対する嫌がらせなんだけどな。

とは言えそして今また。

三月ウサギが屋上の上に避難し、俺も信頼に足る従者への嫌がらせをしないで済むならばパーティ当日まで雲隠れしたいと思う原因事

象が発生した。

今日で五日連続だ。

被害者はヒューだったり、クレセントだったり、たまに俺だったり、その都度まちまちだが。

踊りながらも控え目なノックに敏く反応したヒューを制して嫌な予感満載でそつとドアを開けると、淡い金色の髪をした女子学生が立っていた。

「…誰に用？」

まさか俺が出るとは思わなかったんだろう、彼女は驚いたように緑の瞳を瞬かせて俺を見上げると、次の瞬間顔を真っ赤にして俯いた。

「あ、あの……ドルジアさんに……」

お、ツワモノ登場。

今回は俺じゃなかった。

「ヒュー、お客さん」

足を止めてこちらを窺っている二人を振り返り、金髪美少女ご所望の今日のモテ男を呼び出した。

毎年秋に催される学院を挙げてのダンスパーティー。

このダンスパーティーは成人後の社交界を模したもので、たとえ貴族でなくともあらゆる分野で活躍が期待される学生たちが将来こういった場に出ることも十二分に考えられるので、その際のマナーなどを身に着けることが学院側の趣向なのだが。

実際の本人たちにはそんなのは二の次で。

学生たちにとってはまさに「恋の季節」である。

この本番は給仕やその他一切の仕事は学院側の使用人たちで賄われ、従者も学生と同じようにパーティーに参加することになる。

なぜならダンスパーティーは基本的に男女ペアで参加するもので、男女の主人と従者がそのままペアで参加することが多いからだ。

貴族出身者だと故郷に許婚や婚約者がいる、特に女子学生が他の異性と組むのを控える傾向にある上、全体的に学生は男子比率が高く従者は女子の比率が高い為、どうしても人数合わせ的に両方参加させるのが一番簡単、というのが実際のところだ。

もちろんパーティー無しでも表向きは何を言われることも無いが、まあ居た方が箔がつくと考える見栄っ張りな連中が多いのも否定できないし、事実このパーティー前後には即席のカップルがあちこちで雨後の筍のように大量発生する、らしい。

もちろん今年が初めてなのだから、実際にはその光景を見たことはないけどな。

外見やら身分やら、アクセサリーか何かと勘違いしてないか。

そして更に面倒なことに、世間一般には無い学院の伝統としてパー

テイの前に女子学生が気になる男子学生にエスコートを申し込む、という形で恋心を伝えるという隠れ一大イベントがある。

期間は決まっていらないものの大体ダンスの特別授業が始まる頃からがシーズンとなり、この期間は男子学生からエスコートを申し出ることがタブーとなっている。

特に明文化されているわけでもないのに、暗黙の了解でダンスパーティーに託けて女子が大っぴらに男子に告白が出来る期間、ということになっているのだ。

まあ、それ以外の時期に告白しようが問題なんて全然ないんだが、どうしてかこの時期になると男子も女子も皆揃ってそわそわし出すんだから不思議なものだ。

そもそもの始まりは、昔とある女子学生がダンスパーティーの前に好きな男子学生に告白してパーティーでエスコートされたっていう話が元らしいが、もううんざりして思い出したくもないので割愛。とにかく、そうして今年も勇気ある彼女の後輩たちは普段はこっそり見つめるだけの彼に向かって、一世一代の勇気を振り絞るのである。

今日この部屋を訪ねてきたこの子のように。

「よお」

陰の梯子を登り、案の定屋根の上で転がっていたクラスメイトに声

をかける。

「あいつらはいいの？」

普段ダンスの特訓の時は大抵その横に張り付いているのを知っているから、三月ウサギは怪訝そうに頭だけを上げた。

「外から邪魔が入った上に、うっかり俺まで馬に蹴られそうになったから、退散してきた」

「なんだそれ」

呆れた声を出した三月ウサギの背後から回って風向きを確認して、こいつから見て風下側に腰を下ろす。

「ヒュー狙いの女子が来て、ヴィルがごねて、ヒューが切れた」

「ふうん、なんとかかなりそうなの」

「ヒューの頑張り次第ってとこかな」

「相手がヴィルじゃあね」

超が付くほどばつくりとした説明だったがなんとなく理解したらしく、いつもやりあっている（と言うかヒューが一方的に突っかかっている）ヒューに同情する素振りを見せた。

「いいんじゃないの？長期計画みたいだし、逃げられたら元も子もねえだろ」

急いで事は仕損じる、だよ。

一本目に火を点けて、顔を背けてふっと吐き出す。
紅く点った先端から流れる煙が、風の形を教えてくれる。

秋の空気を幾重にも重ねた空色を背景に、絶え間なく揺れる紫煙を眺めながら気になっていたことを聞いた。

「お前は結局どうすんの」

「何が」

「パートナー」

「無しでいいじゃん、もう」

「あくまでもスマイレ姫一本か」

適当に飲み食いして退散するよ。

三月ウサギは本当にどうでもよさそうにそう言い捨てて盛大に欠伸を漏らした。

もう隠してもしようがない、とでも言うように。

「なんかもう、いろいろ面倒でさ」

「でもお前、最近はそうでもないだろ？」

「ああ、まあ大分静かにはなったかな」

休み前に俺の部屋の前であれだけの騒ぎを引き起こし、この三月ウサギにコテンパンにやられたデジレは、新学期が始まってからはぱったりと姿を見せることはなくなった。

男子寮寮監室に呼び出しを食らった女子学生（しかも最上級生）だなんていくらかあのデジレでも場所が場所だけに結構な醜聞で、ついには実家にも知られて連れ戻されそうになったらしいが、あと半期で卒業ということもありなんとか学院に戻ってきたらしい。

とは言え騒ぎの被害者である三月ウサギも、目撃者たちの証言から『役者』であることが公になり、本格的に学内有名人の仲間入りを果たしてしまった。

元々友人が多い方ではなかったが、後期に入ってから良くも悪くも

俄かに寄ってくる奴が増えて鬱陶しい、と適当にあしらっては俺の部屋かここに逃げ込んでいた。

俺たちは適当に集まって、好き勝手やってるから時折ヴィルが騒ぐ以外は結構大人しいんだと思う。

どうしても大勢の集まるところは好きじゃないらしい。

「人間関係は浅く広く、よりも深く狭くがいいよ。煩いし面倒だし」「貴族としては致命的ですねえ」

自己分析するクレセントにヒューがもつともな突込みをしていたのはつい昨日のことだ。

デジレの一件があつて、一時期三月ウサギは「女に優しくないとか、「女嫌い」だとか根も葉もない噂が立った。

それを耳にする度に、どこが、と盛大に突っ込みを入れたくなる。

聞いていたのは残念ながら俺一人だったが、いつだか本人は女の子大好きだここで宣言していたぞ。

周りがそんな状況なのでこいつに言い寄ってくる女子学生は今のところ俺の知る限りでは現れていないが、表立っては来なくてもそれとなく秋波を送っている女子はやはり結構な数いるわけで。

それがまた男子学生たちのやつかみを買っていたり、いなかったり。

相変わらず、味方よりも圧倒的に敵の方が多い奴だった。

「イリアスは？誰かいるの」

「好きでもない女エスコートして何が楽しいんだよ」

「激しく同感」

「なら聞くな」

「それでも誘われてたじゃない。好みの子とか、いなかったの？」

驚いたことに俺に声をかけてきた女子学生二人の顔を思い浮かべ、頭を傾げながら短くなつた煙草を缶に落とす。

どちらの顔も、もはやくつきりとは思いい出せない。ピンとこなかったということは、そういうことだ。

「何、今の間。…まあ本番で適当に誘ってみれば？」

……………」　　「まったく、あのババアのせいで」

めんどくせえ。

新しく火を点けた煙草を大きく吸い込み、その勢いのまま吐き出した。

「誰、ババアって」

ぼそりと零した呟きをウサギの耳は見事に拾つて、不思議そうに聞き返してきた。

8（後書き）

いつも読んでくださりありがとうございます。

一大イベントついに迫る、ですw

でも主人公たちは一部を除いてやる気なしwwww

次話はパーティ当日、、、、かな。

9 (前書き)

いふことである。

パーティ当日。

「肩に力入ってるぞ」

普段は大抵のことでは動じないヒューの、珍しくガチガチに緊張した様に思わず苦笑する。

氷の帝王はくすくす笑う主人を横目でじと睨んで、無意識に上がっていた肩を深呼吸と一緒にいくらか落とした。

「言われずとも、完璧に務めさせていただきますよ」

「まああいつは色気より食い気だろうから大丈夫だろ」

「イリアスこそ、素敵な女性とご縁があるといいですね」

「お前こそあいつが食い物で釣られていけないように首輪でも着けとけよ」

「私がそんなヘマをするとても？」

そんな悪態を吐き合いながら久々のタキシードに身を包んで早歩きで向かっているのは、ヴィルとその友人数人が準備している部屋。母や姉たちで知ってはいたが、あのヴィルでも一応支度には時間がかかるものらしい。

「ホラ、お迎え」

扉を前にして、まだ緊張が取れきっていない背中をバシッと一発叩いてやった。

「遅ー！みんなもう行っちゃったよ？」

どうぞー、と扉越しの声がした部屋に入ると、ソファに一人座っていたヴィルが勢い良く批難の声を上げた。

どうやら友人たちは既にお迎えが来て、行ってしまった後らしい。

「元々はそっちが時間かかってんだろうが」

「煩いなあ、そういうこと言う男はモテないんだよ？」

憎まれ口を叩きながらもニコニコと笑顔を浮かべてすくと立ち上がり、その場でクルリと一回転して見せた。
じゃーんっ、と自分で効果音をつけながら。

褐色の肌に良く映える珊瑚朱色の生地に濃灰色の透ける薄い布が重ねてあり、胸元と裾とに珊瑚朱色の大きなリボン飾りがついている。大分伸びた真つ直ぐな銀髪は下ろしたまま同じ珊瑚朱色の花飾りが左耳上に飾られ、細い首と右手首にも同じリボンが結ばれている。

「当日までのお楽しみだよ」

そう言っつて、今日の今日までいくら聞いてもヴィルは何色のドレスを用意したのか教えてはくれなかった。

ただ、奨学金で用意した、キラキラした石も何も付いていないシン

ブルなドレスだとほんの少しだけ寂しそうに言っていたのだが、なかなかどうして、よく似合っていると思う。
体が特に小さい彼女には、あまりごてごてした飾りは邪魔になるだけだろう。

「どう？どう？」

「馬子にも衣装だな」

そう言いながらも着飾ったヴィルから感じる違和感。
服装のせいかな？

「言うと思った。イリアスの相手なんてしてあげないんだからねー、だ！」

「ハイハイ、俺には高嶺の花ですよ」

横のバカが手放すわけ無いだろ。

そしてヒュー、お前がエスコート役なんだから、何か言えって。
ぶーたれるヴィルを適当にあしらいながら、さっきから一言も発していない相方に目をやると。

自身が氷漬けになったかのように固まっている、氷の帝王の顔が。

ヴィルの髪飾りよりも、朱に染まっていた。

茫然自失状態でフリーズ、視線はヴィルに釘付けで口は半開き、お世辞にもかっこいいと言いたい。

いいところ見せるんじゃないかったのか。

幼馴染が初めて見せる超がつくほど意外な表情に、自分の目が大きくなるのが自分でもわかる。

…面白れえ。

「惚れ直したってか？」

ヴィルに聞こえない程度の小声にしてやるだけの優しさはあるぞ、俺にだって。

けれど、俺の冷やかしかなんて耳に入らないかのように、一向に解凍される気配が無い。

「あれ？ヒュー？どうしたの？」

何の反応も無いヒューにさすがにおかしいと思ったのか、ヴィルも首を傾げながら声をかけた。

「照れてんだよ」

しょうがないから説明してやった。

だが、自分の事に関しては残念なほど鈍いと言うか、勘のピントがずれているこの妖精はその意味がきちんと把握できなかったらしい。

「あ…すみません、ちょっとぼうつとして」

妖精の声で漸く我に返ったのか、ヒューは口元に手をやりながらつい、とヴィルから目を逸らした。

何でそこで目を逸らす。

もうちょっとシャキツとしろよ。

そして結局ドレスの感想を言ってくれないヒューに、もう、と相変わらずリスのように頬を膨らませたがそれも束の間、トコトコと俺たちの前にやって…こようとして、

「わぁっ」

「うわっ」

盛大によろけた。

同じような悲鳴を上げてとっさに俺が伸ばした腕に引っかかって、妖精は寸でのところで転ぶのを免れた。

ヒューも俺と同じ反応をしたが、それでも呆けていたヒューより俺の方が反応が早かったから、こうなったんだ。

「大丈夫か？」

ふう、と息を吐いて、すっぽりと腕に収まったグレーとピンクの塊を見下ろす。

「お前、その靴無理だろ」

違和感の原因はこれだ。

なんとか立たせると、またぐらりと華奢な体が傾ぐ。

立ち上がったヴィルの、背が高過ぎた。

視線を下に落とすと、床には絨毯に引っ掛けて脱げたハイヒールが片方転がっていた。

「だつて」

「だつてじゃねえよ」

ヴィルを抱えた俺を見てぐっとか何かを懸命に耐えていたヒューにほら、と支えていた両脇ごと手渡す。

悪く思ふなよ、今のは不可抗力だろ。

手渡された身体を大事そうに支えて、ヒューが眉根を寄せる。

「まともに歩けないようではしょうがないでしょう。他の靴はないんですか？」

「…これが履きたい」

二人に諭されたヴィルは俯いて、拗ねたような声を出した。

「踊るところか歩くのもままならないようじゃホールまで辿り着けませんよ」

「またいい笑い者だぞ」

「だって」

「ヴィル様」

子供が高い高いされるような体勢で支えられながら猶も洩るヴィルを、本当に持ち上げて同じ目の高さに合わせてる。

「踊る前に捻挫でもしたら今までの苦勞が水の泡です」

あんなに頑張ったでしょう？

口をへの字にしながらも、優しく諭されるように言われた言葉にくん、と頷いた。

いつもは学年集会などを行っている、どちらかと言えば殺風景なホール。

年に一回、この日だけは魔法でも使ってるんじゃないかって疑っちゃうくらい様変わりするよ、と知り合いの先輩が言っていたのは本当だった。

普段は無い天井から下がるクリスタルのシャンデリアが、いつもと同じとは思えないくらい磨き上げられた床が、架け替えられたカーテンの色が、この日の為に学外から呼ばれた楽団員が、そしてそれぞれに少し大人びた顔をして着飾った学生たちが、今日この日の空気を特別な色に染めていた。

視線の先、控え室で着飾ったヴィルを前に顔を真っ赤にしていた氷の帝王が、一夜限りで出現したダンスフロアの中央で、平均より大分小さい妖精を腕にまた強引なターンを決める。

先程の緊張を欠片も顔に出さず、しかしそのあだ名にはふさわしくない爛漫の笑みを浮かべて。

俺に言わせると、

あーあ、脂下がっちゃってまあ。

になるのだが。

そんなデレデレのヒューの華麗で強引なリードに乗って、特訓中は颯め面ばかりだったヴィルも今日ばかりは楽しそうにヒューの腕の中でくるくるとターンを回っていた。

その様を啞然と眺める同級生たち。

俺はと言えば適当に顔を知った二、三人と踊って、今はホールの片隅でジューズを片手に中央付近で大勢に混じって踊る従者と妖精を眺めていた。

首を廻らすと、ホールの向こう側で扇を片手にデジレが取り巻きたちに囲まれていたが、今のところこちらに寄ってくる気配は無い。あれだけの騒ぎになったんだ。

あいつらにとってクレセントは鬼門だろう。

その鬼門はと言えば、一目で貴族出だとわかるきらびやかに着飾った女子学生たちに取り囲まれていた。

そんな男子学生にとっては夢のような状況でも、その中心にいる三月ウサギは一見人当たりの良い、けれど少し彼の人となりを知る人間には心底嫌がっているのが丸わりの笑顔を浮かべていた。

どちらかと言えば悪目立ちではあったが有名人の枠に優に収まる彼の人気はなかなかのもので、決して数は多くないが途切れることも無い。

見栄っ張りな女子たちにとって、見栄えもするこいつとダンスフロアに出ることはそれなりのステータスになるんだろう。

特に女子は直接的に誘うことは出来ないから、あの手この手で気を引こうとする。

見渡せば、そうした人ばかりが男女問わずあちらこちらに見受けられた。

ここぞとばかりに、普段は声をかけられないあの人にさりげなく声をかけるチャンスなのだ。

いずれにせよ、さながら肉食動物に包囲される草食動物だ。

…こいつの場合、ウサギだからそのまんまか。

同情の眼差しで遠巻きに眺めていると、どうにか極彩色の喧騒から抜け出した哀れなウサギがこちらにやってきた。心なしかよれよれになっている気がする。

「お疲れ」

「じゃあオレ抜けるから」

「一曲くらい踊ってけばいいのに」

「いいよ、食べるだけ食べたし」

バッフェのテーブルに目をやると、ふんだんに用意されているはずのサラダの入った大きなボールだけがきれいに空になっていた。あの状況でいつの間に。

「お前もヴィルと同じだな」

「何が」

「色気より食い気」

「いいんだよ、これ以上変に目立ちたくないし、それに」

ダンスフロアに入ったときから顰めっばなしの眉間の溝を更に深くして、こう吐き捨てた。

「もうほんと煩くて無理」

「俺も抜けようかな」

ため息交じりに呟いた。

俺だって特にこういった会が好きなのじゃないし、目的だけ果たしたらもうここに居る必要は無い。

「とりあえずあいつら見届けたらお役御免なんじゃない？」

そう言ってクレセントの視線の先、フロア中央で踊るヒューとヴィルを見やった。

「そうだな。一服したい」

「あいつらは放つといっても大丈夫だよ」

「俺も後で上行くわ」

「了解」

じゃあ後で、と言い残して身軽すぎる三月ウサギは一番近いバルコニーに向かって行った。

それにしても。

今日はいろいろと面白いものを見たな。

最初のヒューの呆け面に始まり。

パーティが始まって、二人が連れ立って現れた時の同級生たちの顔と言ったらなかった。

ダンスが壊滅的に下手な学年トップの秀才と、彼女を嬉々としてエスコートする、背高の少年。

それが俺の従者だと知る連中からはヒューには非難の視線を、俺には同情の視線が向けられたがどうということはない。

お堅い連中からすれば、主人が一人で参加しているのに従者がパートナー同伴とはどういうことだとも言いたいのだろう。

ヒュー自身も、初めの頃はずいぶんと気にしていた。

主人である俺がパートナーを見つける気がないことは前々からわか

ってはいたが、大事な大事な褐色の妖精を一人でダンスホールに放り込むなんてとても出来そうにない。

だからと言って、主人に恥をかかせるわけにもいかない。

ヴィルがその辺の男に誘われるようなことはないと思うが、分厚い色眼鏡をかけた目からすると心配でしよぅがないんだろぅし、かと言って従者としての立場もある。

だから、涼しい顔の裏で悶々と悩む従者に、一言だけ「命令」してやった。

「俺の数少ない友達を馬鹿にした連中を、見返してやれ」

—まあ、あいつがいいって言っただけだな。

お互いが言葉も話せない頃から一緒に育った相棒は、その言葉をどう捉えたのか。

その日の特訓から、いくら足を踏まれてもあいつのリードするステップは止まらなくなった。

俺？俺はいいんだ、まだ一人で。

もう何曲目だろぅ、中央で踊っているのは上級生が主で、一年は本

当に数えるほどしか居ない。

ほとんどの連中が普通に食べて談笑しているか、場の空気に馴染みきれず隅に寄ってフロア中央を見物しているかだ。

また一曲終わり、初めから踊りっぱなしだった二人が漸く足を止めてこちらにやってきた。

「お腹空いたぁー」

「お疲れ」

上気した頬でパタパタとこちらにやってくるヴィルと、その後を保護者のように歩いてくるヒューにドリンクを手渡してやる。

「…一矢報いてやれましたか」

「ああ、上出来だ」

男二人で周囲の反応に満足し、にやと笑みを交わしていると、ジュースを飲み干したヴィルが割って入ってきた。

「？何の話？」

「何でもありませんよ」

今朝方の緊張は完全に鳴りを潜め、氷の帝王はいつもの笑顔をヴィルに向けてはぐらかした。

「ちゃんと踊れてた？」

「ええ、とても」

「みんなびつくりしてたね」

「ヴィル様が頑張った成果です」

褒められてえへへ、と嬉しそうに笑う妖精がまだ上気した顔で傍らのパートナーを見上げた。

どうしてこれでイマイチ進展しないかな、ホント。

「ところで、クレセント様は？」

「逃げた」

「えーっ」

何かにつけてクレセントを構いたがるヴィルが、また面白く無さそうに頬を膨らませた。

「クレセントと踊りたいのか？ヒュー以外の男じゃ一曲持たないぞ」

人の悪い顔で釘を刺しておく。

「違うよ！何よもう、ほんっとイリアスって意地悪！平気だよ、あたしヒューとしか踊らないから！」

キツと全然怖くない上目遣いで俺を睨んだと思ったら、また周りが啞然とする爆弾を落とした。

その宣言を耳にした連中はそれぞれ顔を真っ赤にしたり、口笛を鳴らして冷やかしてきたり。

そんなわかりやすく反応する周りに気がつき、だが意味がわからないのだろう、怪訝そうに首を傾げた。

口を尖らせつつ、盛大にため息を吐いた俺に突っかかってくる。

「何よ？」

「……お前、自分が何言ったかわかってんのか？」

「わかってるよ」

「わかってねえ」

「わかってるってば、ヒュー以外の人と踊れるほど上手くないことくらい」

わかってねえ。

…脅威の回転率を誇る脳みそはどこ行つた。

呆れてため息しか出てこない俺からふんつと顔を背けると、

「ご飯取りに行こつ」

猛然とバツフェの並ぶテーブルの方へ向かい出した。

ぐいと引つ張られ、目の前で繰り広げられるやり取りに呆然としていたヒューが、くしゃ、と顔を歪めた。

この上なく嬉しそうに、けれど、とんでもなく切なそうに。

…この調子じゃ、本当に卒業までかかるかもな。

9（後書き）

…まだ続きます。

ヴィルがヒューを引っ張って行ってしまった後。

しばらく会場の様子を眺め遠巻きにヴィルの傍から離れないヒューを確認して、俺もそろそろ抜け出すことにした。
人の間を縫って出口まであと数メートルというところで。

「ちょっとよろしいかしら？」

聞こえない振りをして通り過ぎればよかったものを、うっかり足を止めてしまった自分に内心盛大に舌打ちしつつ振り返った先には、薔薇色の髪を高く結い上げ山吹色の豪華なドレスに身を包んだデジレが、あの日クレセントに伸された取り巻きを引き連れて立っていた。

「これはこれは、先輩。今日は一段とお綺麗ですね」

我ながら白々しい科白を吐いて、口角を引き上げる。
目が笑えていないのは、わざとだ、わざと。

「手短にお願いします。これから用事があるので」

話がある、と相変わらず高慢ちきで一方的な申し出を受け、洪々身体ごと向き直る。

「まったく、大人しく引っ込んでいればいいものを。」

「ここは騒がしいから、テラスまでいらっしやい」

こいつの人の話の聞かなさ加減は学院一だろう。

「私はあなたとお話することは何もありませんよ、それに」

取り巻き数人にちらと目をやり、

「あちらの方々がいてはどこでもそうは変わらないでしょう」

あんな背後で睨みを利かしながら対等に話をしようなどと、寝言は寝て言え、だ。

「それともお話というのは、恐喝か何かの間違いですか？」

目を細めて彼らを見やり片頬を引き上げて皮肉れば、わかりやすく色めきたってこちらを睨んでくる。

それ自体は怖くも何ともないが、多勢に無勢だ。

さすがに今ここで面倒は起こすわけにいかないし、騒ぎになったら教官が飛んでくる。

周囲もそろそろ俺たちが対峙しているのに気付いて、ちらちらとこちらを窺っていた。

さてどう切り抜けようかと頭を廻らせていると、当の女豹から思いがけない反応が返ってきた。

「この子達は外してもらっわ。そう時間はかからないから」

「遅かったね」

一本だけ吸おうと思って上がった屋上の屋根には、意外なことにまだウサギがいた。

風を遮るものも何も無い屋根の上は、ここ最近日は落ちるとさすがに冷え込む。

着替えているから一度は部屋に戻ったのだろう。

「ちよつと捕まってさ」

「ふうん？」

大丈夫だった？とは言ってきたものの、誰に、とは聞かれなかった。足止めを食ってしまったたおかげですっかり暗くなってしまっていた。すっかり濃紺に染め上げられた天上は、ビーズのピンをその上にひっくり返したような満天の星空だ。

ヴィルたちは？と残してきた二人について言及されても、仲良くやってたよ、としか返すものはない。
て言うか。

「気になるなら自分で見て来いよ」

「戻るの嫌だ」

「なら諦めろ」

「いいよ、明日ヒューに聞くから」

「……じゃあ俺に訊くな」

「あいつらのすったもんだじゃなかったの」

「いや、別件」

どうやら俺がこんなに遅くなったのはあの二人に原因があると思っ
たらしい。

いや、むしろお前だから。

いつものように自分が風下側になる位置で腰を下ろし、ケースから
取り出した煙草をくわえマッチを擦る。

大きく吸い込んで、口から一気に吐き出した。

煙草はいい。

さっきまでもやもやと胸に支えていたものが煙と一緒に外に出して
しまえている気がする。

「…お前さーあ?」

しばらくお互い無言で夜空を眺めていたが、やっぱり聞いてみるこ
とにした。

どうしようかと思ったが、たぶん、今を逃したら聞かないで終わっ
てしまうだろうから。

「どうしてあんなこと言ったんだ?」

「あんなことって?」

「相手にして欲しけりゃ、髪染めてこいってやつ」

「ああ」

あれか、と相槌を打つとそのままごろりと横になる。

視線は天上に留めたまま、心底不思議そうにぼそりと言った。

「…なんでだろうね」

「意味無しかよ」

知らぬ間に敵を作るタイプか？こいつ。
その辺の計算は出来る奴だと思ったけど。

とりあえず、こいつのあの発言を聞いてスミレ姫の存在を知らない
連中が思い当たるところは。

「あれだと思つてただけど」

「あれって？」

「なんか御伽噺であつただろ」

スミレ姫抜きでこいつがあの子豹に言つた台詞を聞いて脳裏に浮か
んだのは、御伽噺になるくらいの大昔にある国で実際にあつたと言
われる話。

誰もが幼い頃一度は読み聞かされたことがある、有名な御伽噺だ。

何の話をしているのかピンと来ていないらしいウサギに、ホラ、あ
れだよ、と粗筋を話す。

「あれって、」

ああ、と途中で合点がいったらしいウサギが遮る。

「王様が街娘と結婚したつて話だろ？」

どこが被つてるんだ？と薄闇の向こうから睨まれた気がしたが、生
憎暗過ぎてよく見えなかった。

「いや、俺が言いたいのはそっちじゃなくて。…お前、こつちの話

知ってる？」

今クレセントが思い浮かべたのは「表」の噺で。

おそらく世の中の子供たちは知らない、だが最近大人たちの間で実はこちらが原作だと言われている「裏」エピソードを話すと、その血腥さに辟易した声を上げた。

とある国の王様が街で見初めた緑色の髪をした娘を妃にとお触れを出した。

それを見て、玉の輿を狙って女になりすまそうとした愚かな女が大勢髪を緑に染めて城に押し寄せ、騙されかけて怒った王様がそういったらを皆殺しにした、という話だ。

何せ御伽噺になるくらい大昔の話だ、髪が緑色だというだけで惚れた女と見間違えるなんてその王様どんなボンクラだよ、とか、それで騙せると思ってる女たちもどんだけおめでたいんだ、とか、今の感覚でいくと突っ込みどころ満載なのだが。

さておき、その話を知っている連中はこいつがデジレにこの噺の中に出てくるような髪を染めてまで権力ウサギに取り入ろうとする浅ましい女になれと言った、と取っただろう。

デジレも相当に高いであろうプライドを傷つけられたことは想像に難くないし、そこまでしても噺では最後は全員が殺されて終わっている。

いろんな意味で救いようが無い。

「それ、マジ？オレその話初めて聞いたよ」

「最近流行ってるらしいぞ、この手の御伽噺が実は怖い話だったってやつ」

「それでもオレとそれ関係無くないか？」

「でもその辺の連中はそう思っただろうよ」

確かに共通点は「髪を染める」ってところのみ。

髪を染めているというのは、現在でも一般的に後ろ暗いことがある人間だと見なされる。

出自を悟られない為に、特に夜の女たちは髪を染める、らしい。

大昔と変わらず、今の世の中でも堅気の人間がすることじゃないとされているのだ。

少なくとも、実際に髪を染めている人間に俺はまだお目にかかったことがない。

だから例えこの話を知らなかったとしても、世間一般では簡単に人に言っちゃあマズイ一言になるのだけれど。

…こいつ、こう見えて貴族のお坊ちゃんだから、その辺も知らないのかもしれないな。

確かに銀色の染め粉なんてものは存在しない。

普段の様子を見るにこいつの頭の中はスミレ姫でいっぱいなんだろうから、こいつにとっては想い人の白銀の髪が恋しくなって零しただけに過ぎないにしても。

当然その反響は大きかったし、後になってスミレ姫のことを知り、ああそれで、となったわけだが、聞いた時は俺たちも一瞬耳を疑ったものだ。

とは言えそれまでのデジレの日頃の行いもかなり知られていたから、クレセントばかりが責められることはなかったが、こいつ自身の評判を少なからず下げたことは間違いない。

…本人は他人の評価なんて差して気にもしないだろうが。

「ごり押ししても無理なもんは無理。構って欲しけりゃそんくらい

しろよ、みたいな」

「オレがすごく嫌な奴みたいじゃん、それ」

「そうだよ、だから結果あんな大騒ぎになったんだろうが」

「…言われるだけのことされた自覚はあるんだけど」

何やら難しい顔をしながらも納得したような、しないようなウサギ。休暇を挟んで大分落ち着いてはきたものの、一時期一部の女子学生からの風当たりがかなりきつかったのは俺も知っている。

「だからもし銀でなくても本当にあの赤毛を染めてきたら、どうするつもりだったんだろうなと思ってさ」

まああいつの髪が何色になろうがこいつがあの子豹に向くなんて有り得ないけど。

一本だけのつもりが、俺は新しい煙草に火を点けた。

弱ったように溜め息を吐いて、頭をガシガシと掻いた隣の同級生を窺いながら。

「オレそんな性格悪くないぜ？」

「じゃあ付き合ってた？」

「付き合うも何も、あいつオレを子分に加えたかっただけだろ、有名な『三月ウサギ』をさ」

ウサギは苦いものを飲み込んだみたいに顔を顰めて、また溜め息を吐いた。

「ったく、どうしてこう、赤い髪ばかり」

「赤い髪？あー、嫌いだって言ってたっけか」

「相性最悪なんだよ」

「嫌いな奴が赤毛なのか？それか赤毛の奴が嫌いなのか？」

「……嫌いな奴の大半が赤毛。頭が紅い奴らはどいつもこいつもオレの邪魔ばかりしやがって」

らしくない言い草に驚いて振り向くと、拗ねたようにこちらに背を向けてしまっていた。

その相性最悪な連中とのことを思い出したのか、これまでの対・赤い髪との対戦履歴らしきことをブツブツと呟いてる。

ただでさえ薄暗い星明りの下で更に背中に影まで背負って。

…そんな呪いみたいな効果あったのか？『三月ウサギ』のタトウーって。

一応貴族のこいつが口汚くなる辺り本っ当に嫌いらしいが、それにしても。

「完全にお前の気のせいだろ、それ。オスカーとは別に仲悪くないだろ？」

クラスにいる、燃えるような赤毛の男子学生。

髪の色とは対称的に普段は大人しい、けど話題が銃のことになるとやたらと詳しくて人が違ったように熱弁を振るい出す、若干変わった奴。

まあ、普通に接する分には悪い奴じゃない。

特にこいつらの仲が悪そうには見えなかったが、実際はどうなんだろう。

「近寄らないようにしてるから」

赤毛というだけで拒否反応が出るってか。

「話してみろよ、結構面白い奴だぜ？」

「自分から行く気ゼロなんですけど」

取り付く島もない。

重傷だな、こりゃ。

「早く居なくならないかな、あの女」

「まあ、あと四ヶ月弱？」

あの女豹が卒業するまで。

「えー、長っげ〜」

また貴族とは思えない口調で溜め息混じりに呻くと、腹筋を使っ
て起き上がった。

「今のまま大人しく卒業してって欲しいよ、本当に」

闇の中では漆黒に見える髪を掻き上げた少年は、自分で乱したそれ
を左右に振ってげんなりしたように言った。

「もしさあ、向こうが謝ってきて和解したいって言ってきたら、な
んて答える？」

お前が何と答えようと、俺がどうするのかは変わらないけどな。

首を振った勢いでぶるつと身震いすると俺の問いかけには答えず、
さむ、と一人ごちて立ち上がった。

星明りの逆光で、振り向いてこちらを見下ろした表情は闇に慣れた
目でも良くわからない。

どのくらいだろう、こちらを探るようにじっと見ていたかと思うとおもむろに、につ…と笑った、気がした。

「謝罪を受け入れはするけど、二度と寄らないでね、かな」

スタスタと屋根の端まで行くと、最後にもう一度こちらを振り返り、

「もしかたオレやオレの友達に何か迷惑かけるようなら、今度こそ容赦しないよ、って」

言っというて。

冷やりとする声音で告げると、屋根の下に姿を消した。

「はぁーーーー」

知らぬ間に詰めていた息を大きく吐き出す。
お見通しかよ。

「うおっと」

動いたせいで、指の先にぎりぎりで留まっていた灰がぼろっと落ちた。

ほとんど吸えずに終わってしまった二本目を缶に落として、のろのろと片付ける。

寒さで固まってしまっていた体をギシギシと動かし、誰もいなくな

った空中に向かつて眩いた。

「お前らまで渡り付けたりするわけねえだろうが、ばーか」

10（後書き）

本当にお待たせしました。。。

11（前書き）

今年初投稿です。

今年もよろしく願います。

ホールで運悪くデジレに捕まってしまった後のこと。

人気の無いテラスは遠巻きに三人ほどの人影が見えるものの、普通の大きさの声が届く範囲には誰も居なかった。

もう最近日は落ちるのも早くて、端の方に朱を残した空は青インキを流し込んだような濃紺に染まり、レイシーで今の時期にはもう見えないだろう夏の象徴である紅い恒星が、朱色の反対端で煌めいていた。

「で、お話とは？」

不機嫌を隠しめせずに切り出した。

ただでさえあからさまに嫌がっているクレセントに傲慢に詰め寄る様は傍から見ているだけで鬱陶しかったが、あの事件の後から輪をかけてこの女が大嫌いになっていた。

こいつが寄りに寄って俺の部屋の前で騒ぎを起こしてくれてから、元は遠巻きに眺めるだけだったこいつとクレセントの一連の騒動に否応無く巻き込まれる形となり俺たちまで教官たちに目を付けられるようになってしまったからだ。

いろいろとやりづらいつたらない。

本当にこれ以上関わり合いになりたくなかったし、さっさと切り上げて屋上に行きたかった。

風を遮るものも何も無い屋根の上は、ここ最近日は落ちるとさすがに肌寒いんだ。

単刀直入に本題に入ろうとする俺とは裏腹に、指しで対峙したデジ

レは視線を落とし、手に持った扇子を落ち着かなげに弄っている。
その様子からは、どうしたにかいつも見せていた女豹のような肉食系のオーラは全然感じられない。

…そのしおらしい雰囲気警戒心がぐんぐん引き上げられるんだけど。

気持ち悪いし。

自分でも眉間に皺が寄っているのがわかる。

一体何だっけ言うんだ。

「……あなたにも謝りたいと思って」

どうした俺の耳。

今なんだか有り得ない台詞を聞いた気がしたぞ。

「休暇の前に、あなたの部屋の前で、騒ぎを」

「何なんです、今更」

つい苛立ちのままに言葉を遮った。

後から振り返ると過剰防衛気味だったかなとも思わなくもないが。
その時は滑り出した口は繕う間もなく。

「あいつに一体何の恨みがあるってんだあいつが何したって言うんだよ、あんだだけ嫌がられてるんだからいい加減気付けよ頭悪りーな取り巻きにしたいんだかなんだか知らねーけど」

「イリアスいたー！」

見る見るうちに相手の表情が変わっていくのを見ながら、それでも敬語も忘れて捲くし立てた罵詈雑言を遮った声の主は、スカートの裾を翻してこちらに駆けてきた

「ねえイリアス、あつちでプディング食べようよー」

この状況を全然意に介さずにぐいぐいと俺の手を引っ張る灰色と珊瑚朱色の小動物。

面白いものを見つけてはしゃぐ子猫の様だ。

…まったく。飼い主はどうした。

「ヴィル、ヒューは？」

「あつちで隣のクラスの子と喋ってるから置いてきたよ」

はあ？

有り得ない返事に思わず頭一つ下にある妖精の顔を覗き込むと。

ロードクロサイトの左目を器用にパチリと瞑り、ホールの方に視線をやった。

っ、こいつら…！

俺とデジレが指して居るのを見つけて一計を案じたんだろう。

ホールからテラスに続くガラス戸のカーテンの脇に立つ、青を纏った二つ年上の従者をジロと睨んだ。

その直後、ギシリ、と小さいけれど木が軋むような音が辺りに響き、二人して音のした方を見る。

いきなりのヴィルの登場に一步身を引いたデジレが、先程とは打って変わっていつもの調子で扇子を握り締めていた。

「あなた、クレセントに振られたからって、今度はイリアスに意地悪してるの？」

今その存在に気がついたと言わんばかりに、ヴィルが能天気な、けれど呆れたような声を出した。

その台詞にまた一段階女豹の顔つきが陰しくなる。

「イリアスここ寒くないの？早く中入ろう？」

悪戯が楽しくてしょうがない子供の笑顔で向き直ったヴィルに俺は内心盛大に溜め息を吐く。

そしてこの小動物に知恵を授けてここに放り込んだ飼い主への仕返しを高速で脳内に巡らせた。

あの野郎、どうしてくれよう。

「ヴィル様、」

そうして俺の脳内がもっとも効果的な仕返しを見つけ出すより先に膝下手で策士な飼い主がやれやれといった態度でやってきて、果敢にも敵の目前に飛び出した愛しい小動物を俺から引き剥がすと腕の中に隠し込んだ。

…なんかどんどんスキンシップ過多になっていつてる気がするのはいのせいか。

もがもかと暴れる小動物と飼い主の図を見やる生温い視線を綺麗にスルーして、紺青の瞳が紅の美女に微笑みかけた。

「もう私たちに構うのはこの辺にして置かれた方がよろしいのでは？」

皆さんパーティどころではなくなっているようですし。

そう言うてにやりと意地悪く笑んだ顔を今しがたヒューがいた方に

向けると。

野次馬と化した学生たちが窓際に鈴なりになっていた。

「あなたたち……っ」

それらを見たデジレの顔は見る間に赤くなり、結い上げた髪にたくさん飾った髪飾りが飛ぶのではという勢いでこちらを振り向くと、憎々し気に睨みつけてきた。

あー、今の顔のほうがしっくりくる。

嫌いだけど。

「イリアス」

妖精から目を離れた従者は打って変わって呆れたような、冷えた目をこちらに寄越す。

「全くあなたという人は、女性に庇われるなんて紳士の風上にも置けませんね」

「知るかよ、止める暇なんてなかっただろうが。つーかお前が仕込んでんだろ」

「言い訳をする男は見苦しいだけですよ」

「まあイリアスはもうちょっとレディへの態度を勉強したほうがいいよ」

「そのくらい知ってるさ。ただ身近にレディがいらないからな」

「なによあ、それどういう意味!？」

「聞き捨てなりませんね」

「つーかお前もこいつの躰がなってねーんだよ」

「躰? なんのことです」

ああ言えばこう言う。

心配されるのは腹立たしいが、現に冷静さを欠いて悪態を吐いていたのだからとつさに言い返す言葉も口から出て来ず、結果口角を下げてあさつての方を向いた。

主に向かつてなんて言い草…なのは日常茶飯事なので気にも留めないが、聞いていたデジレは茶色い目を丸くしていた。

まあ主人と従者がこんな風にぎゃあぎゃああとタメ口で口喧嘩なんて普通なら有り得ない。

周りに人が居ない場合はどうあれ他人の目があるところでは、「主人」と「従者」なのだ。

だがそんなことはお構いなしの氷の帝王が、無視されたことで怒り心頭の女豹に向き直る。

本領が発揮するのはこれからだ。

止める気も無いから、釘だけ刺しとこう。

「いいからヴィルの耳塞いどけよ、お前」

「えっ、ヒューっ！なんで？あたし悪くな」

「ヴィル様、ちよつと静かにしててくださいね」

ごね出した腕の中の妖精にそう囁くと、問答無用で両耳を塞いだ。

誰か温度計持つてないかな。

につ……と笑んだ顔と、あの視線の冷たさの温度差を測りたい。

「いつまでも私たちになど感けていないで、卒業まで大人しく花嫁修業でもしている振りくらいしたらどうです？いくら名士と名高いご両親と言えど、あんな騒ぎを起こした娘をこのまま許婚の下に出すのは相当骨が折れるでしょう」

氷の眼差しが、食物連鎖の頂点に位置するはずの豹を射すくめた。これの怖さは実際に睨まれたことのある奴にしかわからないだろう。

「私などからすればあなたが未だ学院にいるこの事実を見るだけでご両親のご苦労が偲ばれるというものですが、将来どこにやるとしても卒業も出来ずに中途退学となれば再度もらい手を探すのは輪をかけて大変になりますね。ですがこれ以上親の顔に泥を塗るような親不孝な娘には、やはり金はあるけれど品性の無い成り上がりのジジイの後妻あたりがちょうどよいのでしょうか？」

この薄闇の中でもわかるくらいに顔色が変わり、ぐつと言葉に詰まった様子を見ると、今ヒューが言ったことは大方合っているんだろう。

…相変わらずどこで拾ってくるんだ、そんな話ばかり。

「それさえももし破談となれば、傾きかけたご実家はどうなるのでしょうか？ どうせ将来望まない結婚を強いられるからここに居るうちにちよつと羽目を外したかったというのであれば、他所でやっていただければよかったものを。これだけ我が主はじめご友人方に迷惑をかけられては従者たる私もこれ以上は黙ってはいただけません。ただで済むとは、思っていないませんよね？」

北の海の底を思わせる青が鋭利に細められる。

…ただで済まないって、何するつもりなんだ、ホントに。

これが口から出任せでないのはガキの頃から付き合いだ、よく知っている。

我が従者ながら、真剣に敵に廻したくないと思うのはこんな瞬間だ。

11（後書き）

…長くなりすぎたので途中で切りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5696t/>

青薔薇の加護を君に。

2012年1月13日23時02分発行